始

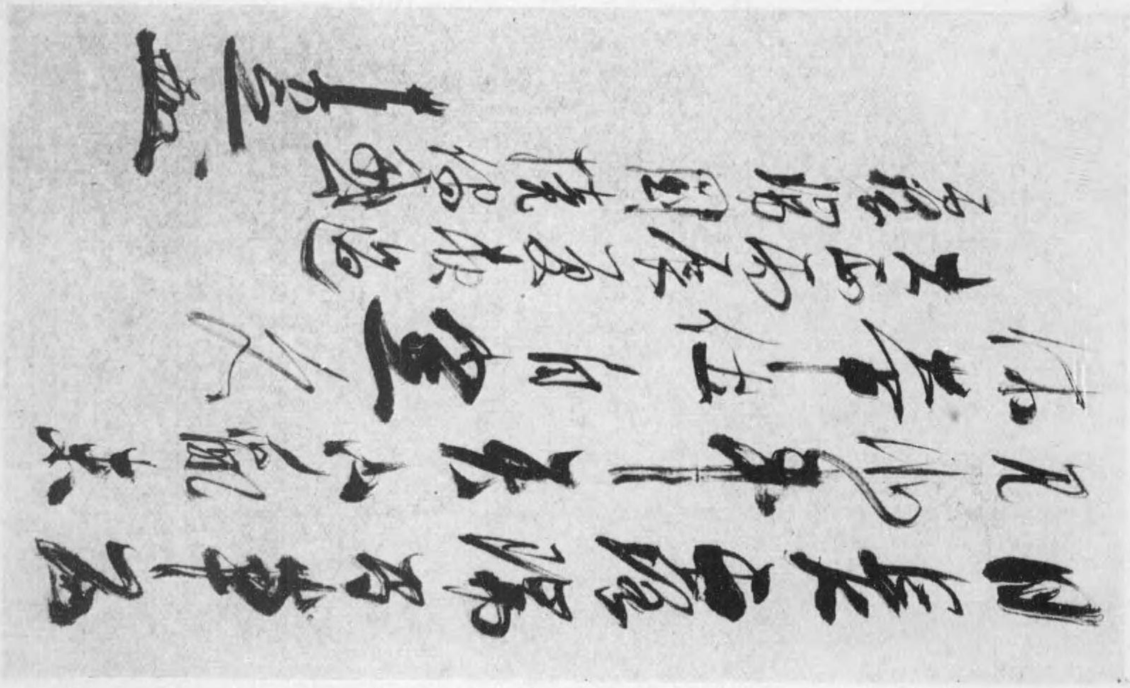
318
360
0 複写

3.10.2

318-360

軍談

海軍少將 秋山眞之



軍談正誤表

頁	行	誤	正
目次八	二	海車	軍
九	一	重要視せられざれば	るは
九	四	孰れか	誰
一二	一〇	予等	子
一五	二	彼は	彼等は
二四	四	若し	假し
二九	三	處分すべく	き
二九	一〇	休養とか	で
三一	六	愛ぜ	愛で
三二	七	掛代へなのい	のな
同	一〇	保安	全
三三	一	滅殺	滅
同	八	封鎖兵力に倍加	封鎖兵力が敵に倍加
三六	一	山東の地方	山東角の北方
三九	一〇	山在角	東
四二	六	海峡	戦
四四	八	互り	亙
同	九	洵難	殉
四六	五	唯々	だ
同	八	雙	隻
四七	一	我艦隊の	我戦艦の
同	二	雙	隻
五三	七	少將	佐
五六	五	樹て、	樹てゝより、
五八	七	風土惡	風土劣惡
五九	九	日本海た	に
六〇	四	ムラヴヰヨク	フ
六一	六	ムラヴヰヨク	フ
六二	六・三	ムラヴヰヨク	フ
六三	三	ムラヴヰヨク	フ

同 同 同 同 一 一 同 同 一 同 同 一 一 一 一
二 二 二 二 二 二 二 二 二 一 一 一 一 一
九 六 四 三 〇 九 八 七 六

八 七 六 四 八 〇 八 五 三 六 九 六 七 六 六 四 〇 四 八
太平洋位の雌雄の爭が闘。 今度の巡遍。我が艦隊の二に。固より 米國艦隊の巡航 交通機の巡航 米國艦隊の巡航 潛水艇。定まらず。保存。攻撃。實力と。 今。安。第。全同。全一艦隊 金剛艦隊一年 金剛艦隊一年 急閃。費する。 制服。

に。太平洋位の 交通機關。隊の此。の巡航 周。我の二。は固の比例より 潛水艇。足らず。 有。勞。上。者。完。國。 一艦隊 金剛艦隊一年。 遷。投費する。 隈。

一 同 同 同 同 一 一 同 同 一 同 一 同 同 一 一 同 一 三
三九 六 七 六 六 四 二 一 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 〇
六 七 六 四 二 一 五 〇 四 二 三 八 八 三 二 〇 九 二
蹴。相 蹴。會 歲。似。出。目 目的外 國滑なし 造船兵造機で。 考へに。が。で。 夫れ。が。い。安全 相續。家 一。年 支度。那に。 襟。據。正。三年 大。撃。及ぼさ。軍に。 落しつ。 我。艦隊。

義。相 須。歲。出。目的。以外。ら。兵造機 造船。國。滑船造船 考へ。ど。 夫れ。で。 須。國。年。 支那。 庶。本。撃。及ぼ。 の。落しつ。
つ。と。し。て。 て。 つ。 々。の。 さ。ろ。ね。

八 同 八 八 七 七 七 七 六 同 六 六 六 同 六 六 六 六 同 六 六 六 六

一四八	一〇	ことなし、	ことなし。
同	同	地方	中
一四九	五	細實	確
同	七	以來	外
一五二	三	足るを	足らざるを
同	四	終りに	削ル
一五四	二	予は	白分は
一五五	四	予は	自分は
一五八	二	例外中例外	例外中の例外
一五九	一〇	一人の	た
一六三	三	此に塵の	此の塵に
一六四	三	國體	國
同	四	國政の	も
同	五	得られざるときは、	得られず、
一六八	三	一家も國も	一家も一國も
同	五	大きな	く
同	七	前體	全
同	七	少く	小く

一六八	八	少く	小く
一六九	八	我國固有の國民性である	削ル
一七二	一〇	大正二年二月古典攻究會講演	入レル
一七二	八	經隙	體
一七三	三	性質	素
同	四	型造	形成
一七四	五	貨物	怪
同	同	三同	日
一七六	三	出でたりしは	さ
同	一〇	冬期	終
一七七	七	落すとか、	薄くするとか
一七八	九	捜索の	捜索及彈着觀測の
一八〇	五	隱散	蔽
一八一	一	平押し	平押しの
一八二	六	形城	成
一八三	一	海陸軍の	海陸軍兵器の
同	五	歳々刻々	歳々時々刻々

一八三	六	施節	設
一八六	二	文章	書
一八八	二	孰れ	た
一九六	一	爲政治家	爲政家
同	四	自然主義は、	自然主義其物は
同	七	策戰	作
一九七	二	元々	と
一九八	六	此主主旨	御
同	一〇	外でない。	外でもない。
二〇二	八	戰爭	備
二一一	七	攻擊	勢
二一五	二	中壁	堅
二二二	三	比較	較
同	一〇	應ぜしめ	應ぜしむる
二二五	三	其處だけ	が
二三六	二	其任に合ふ	かな
同	四	整齊にする第一要義なりとす。	整齊する第一要義とす

二三七	一	示し	す
二四〇	二	指揮の下に	一指揮の下に
同	九	一令に服す	し
同	一〇	士卒	兵卒
二四一	九	不能律	紀
二四四	六	誠なくして、	誠なくして、
同	八	漸次に誠の	漸次に至誠の
二五五	一	皆兵の主義	皆兵主義
同	一	戰禍の	に
同	五	外ないではあらう	外ないであらう
二五七	一〇	弛め	弘め
二五九	七	守辯	手
二六三	一	情態になるとき	あ
同	四	吸收せるも、	吸收せざるも
同	同	然料	燃
同	七	態度	溫
二六五	五	一般	段
二七〇	五	得る今日	得らるゝ處で、

二七一	一	軍國	國制
二七二	一	利有（きか）	おか
同	七	任せ	重
同	一〇	裏石	鉛
同	一〇	水鋭	
二七三	二	海外工業品輸入減少	海外工業品の減入減少して
二八二	三	し第一	二
二八四	一	日米戰爭が	日米戰爭談が
二八五	四	弱國に對して	弱國に對しても
二八五	九	對へて居た	置いた
二八六	三	大正五年十一月新聞	入レル
		掲載	
二八九	一	無理で	無理に
二九一	一	至力	主
同	五	敵軍の兵力	敵軍兵力
同	七	ればならぬ	ヂ
同	八	戰備	線
二九二	七	主眼戰略	主眼の戰略
二九七	一〇	講演	談

序

海陸の軍事に關する秋山海軍少將の言説見るべきもの少からず。少將嚮に歐洲の大戰を視察して歸朝せられ、必ず其着眼の尋常ならざるべきを想ひ、之に就き、我國民に資すべき著述あらんことを乞へり。少將の曰く「予本來言論を好まず、唯だ稀に言はざるべからずと感ずる

處を言ふのみ。近時の人心日日に腐り、口筆益々多くして、志行愈々薄く、予は寧ろ書を焚き學者を坑にするの必要を感じつゝある今日、自ら進んで、好まざる文筆を弄するに忍びず」と。再三乞へども容れられず。仍て、少將の意見の世に表はれたるものを、蒐集して、之を上梓せんことを以てせしに、少將又曰く「予が時に觸れ物に感じて、偶々發露したる所見、其文拙きも其意は後世に愧ぢざらんと期したるものなり。敢て之を拾集さるゝは貴方の任意にして、予の關する處にあらず」と。是に於て、村上貞一君に托し、氏が多年拔萃したる少將の言說を列叙し之を『秋山海軍少將軍談』と名け世の軍事に心ある人々に頒つと云爾

實業之日本社長　増田義一

軍談目次

黑船初めて江戸灣に來るの圖に題す……二
異境に日本の今昔を語る壁上の古額——米艦江戸灣進入の實見談
——米艦上より見たる當時の江戸灣沿岸の光景——奇異なる日本
昔日の出港式——三百年前已に日本は三檣の備砲艦を有せり——
皇國海軍の發芽——童話桃太郎の新解說
黃海海戰の回想……二三

海戰史上の不可思議なる事實――東郷大將の報告文――巧妙なる吾が策戰法――上村艦隊の動作――蔚山沖の海戰――戰果收まらず日波に沒す――海戰は大海原の鬼事――戰爭にも戰運あり

露國の北亞經略由來……五三

露國の對亞細亞經營――ベーリング海峽の發見――露の南下――英佛のカムチャツカ經營――樺太を半島なりと信ず――樺太日本の手より離る――露清の交渉――樺太千島の交換――露帝の巡幸と歐亞貫通鐵道――日清役の漁夫――露の東亞策頓挫――今昔一轍

日本海海戰の回想……七一

數字上の優勢と實戰果――皇軍の興廢此の一擧にあり――十年練磨の功も用ふるは僅に卅分間――過去の海戰は皇軍の大捷に歸した――超弩級の時代――火繩銃でも竹槍でも――未來の海戰は十五分間の勝負

海軍補充の近況……八七

補充は補充なり擴張は擴張也――艦齡の三期――日本の見本艦隊――一戰術單位と五十萬噸說――兵器の進歩と補充の必要

列國海軍の趨勢に對する我海軍の現位置……一〇一
後の烏が先になる——日露戰爭は兵器の新紀元——新式艦一隻に舊式艦十隻でも戰爭にならぬ——新海軍建造の發足點——列强海軍の位置に變化が劇しい——遠洋萬里渡航不可能說の迷妄——一發の拳銃彈世界の均勢を破る——國富んで國破たる白耳義の兵備——兵備と商工業

米價と國防の關係 附燻炭肥料普及の必要……一四一
米價の波及する範圍——米價の調攝は國防の根本也——米作と燻炭肥料——予の實驗より燻炭肥料使用を勸む

支那と對比して日本國民性の自覺……一五三
天の命是性、性に率ふ是道——性格の相違と知情意の發動の相異——支那人の性格——支那人には情死がない——個人的現在主義——支那人の箇性を作れる源因——日本の閥族心を善用せよ

大戰後に於ける兵器の進化……一七一
兵器の進步と新海軍の創造——日露戰役より歐洲大戰迄の兵器の進步——潛航艇、飛行機の發達は戰鬪を平面的より立體的に推移

す——將來は空中戰

歐洲大亂の心的原由……一八五

マッチ一本で武藏野を燒く——獨逸を過らしめたる自我主義——朕は天命を奉じて世界に君臨す——獨逸の思想と二大哲學者——自我主義の末路——チユートン民族は本來低能なり——短期戰策の失破——獨逸思想と我が思想界——物心兩方面の不調和

歐洲大戰の三大力素……二〇一

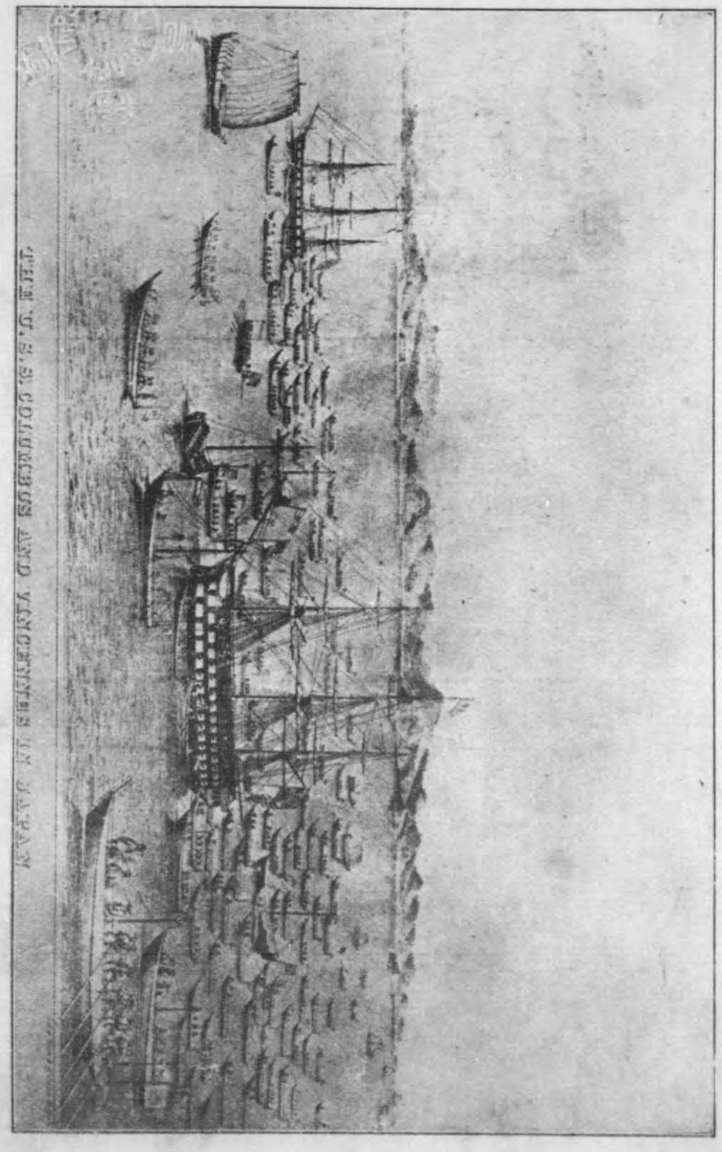
予が豫言の的中——獨逸の陸軍力——佛國の眞正擧國一致——歐洲戰と家康の戰術——英國の海軍力——獨逸海軍の屏息する理——戰爭と財力——獨逸の財政

軍紀の整肅……二二七

軍紀の意義——命令には絕對服從、實行には獨斷專決——士氣と軍紀の別——軍紀振肅の七要件——軍紀整肅の方法

歐洲大戰と工業……二四九

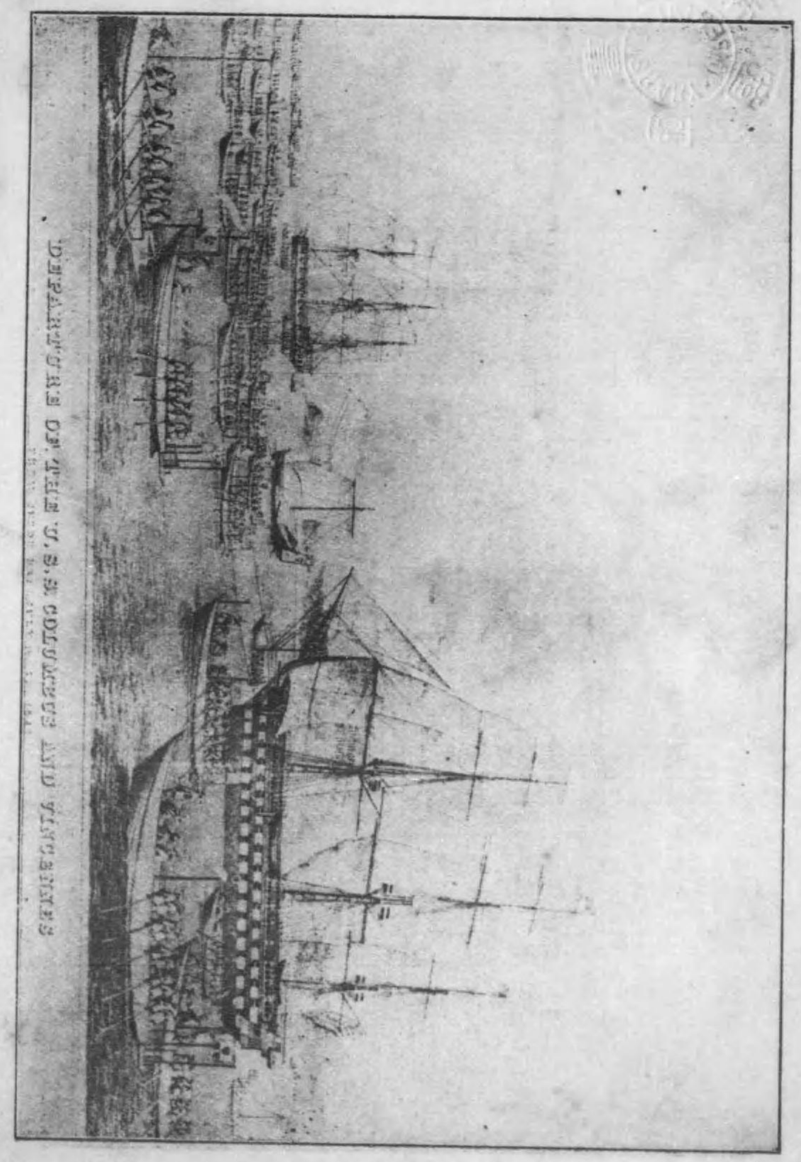
機械力七分人力三分の戰爭——夫婦共稼の戰爭——工業經營上の進步——歐米の工業技術上の發達——鍊鐵術——電氣爐に付いて戰時の工業



目次

米國海軍の大擴張……二七五
米國海軍大擴張の眞意——米國海軍の擴張案——新造艦隊の設備
——黃色紙の日本來寇說
世界大亂の將來……二八七
大戰の終末期——政略と戰略との混交戰——强さうで弱い獨逸——獨逸の屈伏する時は歐洲に平和が來り世界に波亂が起る——主義思想は爭鬪の基——誓紙證文は反古、義理人情も賴るに足らず

——目次終り——



秋山海軍少將談

海軍歷史館

黒船初めて江戸灣に來るの圖に題す

異境に日本の今昔を語る壁上の古額――米艦江戸灣進入の實見談――米艦上より見たる當時の江戸灣沿岸の光景――奇異なる日本昔日の出港式――三百年前已に日本は三檣の備砲艦を有せり――皇國海軍の發芽――童話桃太郎の新解説

右に掲げたる二葉の圖は、今を距ること五十餘年前、米國水師提督ゼームス、ビッドル氏が、軍艦「コロンバス」及「ヴインセネス」の二隻を率ゐ、始めて江戸灣口に來りし時の景色畫にして、目下米國海軍少將ルース氏の藏せらるゝ處なり。一日少將不肖を其書齋に引き、壁上二面の古額を指して

曰く、之れは是れ予が少尉候補生たりし時、初めて貴國江戸灣に至りし時の手取畫にして、當時乘組の一人たるジョン、イースレー氏の手寫したる處なりと。不肖異境に此古畫を創見し、母國今昔の感に堪えず、少將に當時の實歴談を聽かむことを乞ふ。老將爲に昔を語つて曰く、

回顧すれば、千八百四十六年(弘化三年)七月二十日の事なりし、「コロンバス」及「ヴインセネス」の兩艦より成れる吾米國極東探檢艦隊は、水師提督ビッドルに指揮せられて、喜望峰を廻れる長途航海の末、遠征の極端たる江戸灣口に進入することを得たり。固より初度の探檢にて、水路も明かならざれば、測鉛を投下しつゝ徐々に灣口に進航せしが、幾もなく、數隻の小舟兩刀を腰にしたる武士を乘せて、海岸より吾艦間近く

漕來り、之より深く入港すべからざるの意を通ずるものゝ如し。吾提督は日本人の感情を害せざらむと欲し、其意に從ひ直ちに投錨の用意を命じ、次第に減帆して船脚を止め、海岸を去ること約三海里の處に投錨せしが、暫時にして以前の如き數多の小舟海岸より吾兩艦の周圍に蝟集し來り、瞬く間に其數二三百許りともなれり。舟中には例の兩刀の武士多數乘組み居り、或は呼び或は叫び、多少不穩の形跡見えたりしも、別に抵抗するの模樣も無かりし。軈て諸帆を疊み終りたる後、日本高貴の武士とも思ばしき人、吾旗艦に上り來り、提督に面會して至極慇懃に挨拶し、和蘭語を以て先づ兩艦の大砲、小銃、彈藥其他一切の武器を陸揚せんことを請求せり。蓋し、武裝せる艦船は日本の海岸に近づく可からざるの主意なりしと察すれども、此の如きことは爲すべきにもあらず、又爲す能はざることなれば、提督は鄭重に事情を陳べて、之を拒絶したりし。次で、何故に此地に來り、又何か求むる處ありやの問に對し、提督は、向後吾米國と日本との間に好誼ある親交及通商を開かん爲め、遙々此地に來りたるの意を述べ、且つ薪水野菜等を購買するを許可せられんことを請へり。其後交渉連日に亙ると雖も、奈何せん、當時吾艦蘭語に長ずる者無く、貴國亦英語に通ずる人無きを以て、相互の意志を完通すること能はず、得る處の要領唯だ異國艦船は西方の一港長崎の外、入港するを許さず、又薪水食品の供給足る時は、一日も早く江戸灣を去るべしと云ふに過ぎざりし。

昔を語る老將の談話を聞きて、舊懷考古の情禁ずる能はず、更に當時兩艦の碇泊せしは今日の何邊なりしや、又當時我國民の情態を如何に觀察されたるやと問ひしに、少將の曰く、

遺憾なる哉、余は不幸にして其後一回も子が國に至るの機會を得ざりしが故に、當時吾遠征艦隊が江戸灣口何の邊に投錨せしやを想起することを能はず。殊に當時一切上陸を拒絶せられ、且つ吾兩艦の間に往來する短艇にすら、四五隻の日本舟隨伴して警戒するの有樣なりしを以て、毫も探査するに由なかりし。唯だ海岸一帶丘陵起伏し、綠蒼たる樹木之を蔽ひ、遙かに富士山の其上に聳立するを見たり。德川幕府の所在地なる江戸の市街は、碇泊の位置より北西に方り、約十五里の處に在りと聞きしが、高き岬頭（觀音崎ならんか）に遮られて之を望見すること能はざりし。止まること九日間、日々數百の日本人吾艦に來り、皆な艦内の機具を見て奇異の感を爲せるもの〻如く、又無知より起れる無禮もありたれども、概して慇懃溫厚なりし。殊に陸上より送り來れる、鷄豚野菜等に代金を拂はんとするも、敢て受けられざりしは稍廉潔に過ぎたるかと思ひし。是等は吾一行が、當時貴國に於て觀察し得たる處の一斑なり。已にして、貴方より通商互市は到底許諾し難きが故に、薪水食品等の需要足るときは、可成速に江戸灣を去らるべしと催促さるゝのみならず、吾方に於ても、通語不充分の爲め到底目的を達する能はざるを認め、遂に成功を後日に讓りて、七月二十九日出帆することゝなれり。其日我兩

艦愈々出港と知れ渡るや、數百の日本舟は、舳艫相繫ぎて數十の縱列を形作り、各〳〵吾兩艦の前部に曳纜を取りて、之を引き出さんとしたること此圖に示すが如し。然し左程の效力も無かりしは笑止千萬なりし。軈て我が兩艦は順風に帆を展し錨を揚げ此の記憶すべき江戸灣を辭して太平洋に出でたり。それより海路一萬餘里、南米の極端ケープ、ホーンを廻りて、故國に歸りたるは其年の末方なりし。以上述べたる處は、實に吾米國軍艦が貴國太平二百餘年の長眠を覺破したる發端にして、其の後六年卽ち一千八百五十二年(嘉永五年)水師提督ペルリ更に軍艦數隻を率ひ、國書を齎して浦賀に至り、交渉年を重ね、終に彼の通商條約を締結し得たるものにて、吾等初度探檢が、此後者に資料を與へたるもの少しとせず。而も此記念すべき初航遠征が、貴我に左程重要視せられざれば、老生の今尙ほ遺憾とする處なり。想へば之れ五十餘年の昔語りにて、往事を追懷すれば、眞に夢の如く、當時貴國の狀態と、今日日進の現勢とを比較せば、孰れか今昔の感なからん。余享年玆に七十有三、見來る人類歷史の變遷數多ある中にも、余が少尉候補生より此老將たる迄に、進化したる日本の步武程速大なるものは無く、特に子が奉公せる海軍に關しては、最も進步の著しきものあるを認む。見よ五十餘年前、子が母國の海軍は見る影だに無く、若し强て之ありと言へば、此圖にあるが如き翩々たる小舟の一群なりし。然るに現時は如何、大艦速艇數を連ね、優に世界海軍國の席次に伍入せるにあらずや。嗟、既往の進步を推測す

るときは、又將來の發達をも期して待つ可く、而して過去は先進の經營、未來は子等後進の奮勉にあり。例へば、親の讓りの千弗の遺産を運轉して萬弗に增産したりとも、尙ほ子たるものゝ功は、本來無一物より千弗に高めたる親の力に若かざる如く、凡て功業は倍力の比例に準ずるものなれば、子等年少の海士、先進の慘憺たる經營に成れる海軍の遺産を繼ぐも、只之を保守するのみにて能事了れるにあらず、益々遺産を有效に活用して邦家の利益を圖り、更に勢力の增進を爲し得てこそ、功を先代と同うすと謂ふを得べし。進む世界に際限無く、人事程度のあるべきにあらざれば、今日本の海軍漸く其の基礎確定せるが如しと雖も、尙ほ列國海軍の增進に伴ひ、將來幾倍の增勢を必要と感ずる時節到來せん。子等年少果して能く之れを爲し得るや否や。

趣味深き老將の至訓、自ら客心を刺戟するを覺えしが、去りとて、吾國の歷史上海軍の發達に一時の頓挫ありしも、三百餘年前、吾人の祖先は已に三檣ある備砲艦をも有したるものにて、少將の言はるゝ如き、翩々たる小舟に創りしにあらざれども、兎に角、篤實なる敎訓、言を返すは不敬と默し、言はんと欲して言ふ能はざるもの之を久しうす。少將不肖の意色を察し、莞爾として微笑し、更に話を轉じて曰く、

過去五十年間に於ける、日本海軍の進步は驚くべきことなれども、又吾人の從事する海軍技術の發達も亦絕大ならずや。爾來木艦は鐵艦と化し、汽船は帆船に代り、煩砲、水雷、裝甲等進步の階段も亦之に準ぜり。試

みに今日の富士、八島兩艦と此圖に在る、『コロンバス』、『ヴキンセネス』の二艦とを比較せば、今昔優劣の差隔非常なるものあるを認むべし。斯くの如く機物進歩すれば、隨つて之を活用する技術も進歩せざるべからざれば、唯徒に舊法を墨守して、新利器を運用せんとするが如き愚を爲すべからず。又過去五十年の進歩、已に此の如しとすれば、將來五十年にも亦同一の程度を以て進歩すべく、而も此の進歩や時々刻々の間に起りつゝあるものなれば、將來の歴史を形成すべき年少は、造次顛沛之れが注意を忽にせざるを要す。予等老骨已に時勢に後れたりと雖も、是れ余の後れたるに非ずして、全體が進歩したるものなり。夫れと等しく予等年少も、啻に今日の程度に安んじて、進歩に伴ふ研究を怠る時は、他日官位は進み、頭髪は白くなるとも、終には亦年少氣鋭の後進に老朽視せらるの時來らむ。若し夫れ終始時勢に後れざらんと欲せば、人間は到底終生勉磨せざるべからず。

以上は則ちルース少將が古畫に對して、往事を語り、今昔を比較して、不肖に訓戒されたる處にて、其言篤實深切、吾海軍後進をして過去の事情を追想せしむると同時に、又將來の希望を大ならしむるものなるを認む。實に少將の言の如く、皇國の新海軍は、此五十年前外部の刺戟に依りて、其萌芽を發生したるものにて、嘉永の初年、幕府創めて一二小艦を購入したるに發端し、日の丸の軍艦旗も此時に定められたり。爾來内國爭亂の爲め其の進歩に消長ありたれども、先達卓見の士相襲いで慘憺たる經營を續け、

漸く現時に至りて眞正海軍の基礎確定せんとするに至れり。然りと雖も、更に又三百年以前の舊事を追想するときは、今世の海士が遺憾とすべきこと少しとせず。當時我國の祖先は、已に三檣の備砲艦をも有して、優に其時代に於ける他外國艦舶に匹敵するに足るの位置にありしも、德川幕府の姑息的內治政策と、鎖國太平の偸安惰性は漸次に海業の退歩を來し、之に反して泰西諸國の海軍は、生存競爭の結果として長足の進歩を遂げ、降つて弘化嘉永の頃には、彼我發達程度の懸隔、實に此圖に示すが如きものと化し去り、强弱優劣最早拮抗する能はざるの姿勢とはなれり。之を想ひ彼を思へば、無事太平なる一時の現象は、人生の最大幸福なるか又最大不幸なるかを判斷するに難からざるなり。米將ペルリ――ネベリスコイが僅々五艘の小艦を以て、日本全國を震動せしめたるは此時なりし。魯將――ネベリスコイが隻艦を以て、今の黒龍江沿海洲を經略し、吾樺太を覬覦したるも此頃なりし。彼は各〻、唯我君國獨尊の國旗を飜して、海外萬里に雄飛活歩したる際、吾國民の上下は頓に長夜の夢醒めて、陸上に攘夷を喧呼するも、之に應ずるの實力も手段も之れ無かりし。若し此時に當り、吾國の海業が三百年以前の歩武を以て發達し居りたらんには、能く外侮を禦ぎ得たるのみならず、彼の來るを待たずして我より押掛けしたらむものを、遺憾なりしと謂ふべし。是は既往の事歴、今更に憤悔するは愚痴の至極なり。唯だ今世の吾人は、父の時代に於ける窮困狼狽が、永年の逸樂に耽りたる過去先代の因果應報たるを悔悟すると同時に、更に未來の善果を期して現在の原因を積むに力む

べきのみ。今や父の時代に於ける辛苦經營の功現はれ、漸く眞正海軍の基礎確立し、一陽來復、順逆轉環の機運は、將に今後に發動せんとするにあらずや。さなきだにルース少將の言の如く、昔江戸より長崎に至る時日を以て、今東京より倫敦に至り得る進歩的當世に於ては、世界の表面も之に比例して縮小し、其三分の二以上を占めたる海洋は、艦船構造の進歩に依り、最速最安の大道と化し、又蠻馬に跨りて陸上に齷齪し、後方勤務の缺乏を窮訴する必要も少く、爲めに海上武人の責任は、海上武力の全盛と共に、愈々益々其の重を加ふるの時節となれり。是に於てか、吾々今世の海士は廣く眼を世界の全面に注ぎ、遠く意を海國の將來に着け、海氣を振揮し、海術を練磨し、此一生を海洋に終始するの大覺悟あらざるべからず。

此の如き多望多事の時に當り、若し支那朝鮮の近航に故郷を思ふが如き海國人ありとすれば、帝國の光威は、世界は愚か東洋の一隅をだに照明する能はざるなり。嗚呼人類の歴史は常に循環せり。過去五十年の昔を寫せる此圖は、未來五十年に於て其位置を代へて描くこと能はざるか。蓋し天は自ら助くる者を助く、月桂冠は其冠下に頭を入るゝ國民の頭上に榮降するものならむ。

不肖は此圖に關聯して、耳底に殘れる亡父の訓話を聯想し、吾國の祖先は遠き昔より已に海氣の振興を後世に訓戒したることを想起せざるを得ず。不肖幼少の時、亡父屢々『鬼ケ島桃太郎』の昔噺を說明し、不肖を訓めて曰く、

桃太郎が日本一の吉備團子を携へ、之を與へて犬と猿、雉を從へ、遙々海を越えて鬼ヶ島に押渡り、鬼人を退治し、財寶巨萬を船に積みて故國に還り、其老父母を喜ばしたる童話は、吾國の人誰しも之を知らむ。此噺の中には深き意味を込めたるものにて、日本國行末の繁昌を願ひて、先覺の知者が後世子孫を諷訓したるものなり。『桃太郎』は卽ち百太郎にて、百は多數の形容、太郎は日本男子の通稱なれば、『百太郎』とは取りも直さず日本多數の男子と云ふを意味せり。又『日本一の吉備團子』は就中大切の意義を含めり。其『日本一』とは日本第一に非ずして、日本一ッ卽ち擧國一致の意、『吉備』は十全、『團子』は圓滿團結の意ありて、之を一括すれば、擧國一致して充分の和合團結を保つべき大本を示したるものなり。又、犬、猿、雉は、禽獸の性能を以て、人間の心力を表示せるものにして、犬は忠實、勇敢、猿は烱智、敏捷、雉は堅忍、慈愛の天性を有し、又犬は地を駛るも木に登る能はず。猿は木に登るも空に飛ぶ能はざれば、犬、猿、雉は各特有の能あり。人たるもの此六性三能を兼備すれば、如何なる難事に當るも失敗すべきものにあらず。『鬼ヶ島』は海外赤髯の鬼の住む處、又其持てる寶物は、單に金銀珠玉にあらずして、有形無形、彼の長所利點と心得て可ならむ。之を要するに、此桃太郎の昔噺は、『日本多數の男子は故國に戀々たらず、海洋を越へて外國に渡り、箇々の名利に拘らず、擧國一致の團結を保ち、天賦の心力たる智、仁、勇を應用して、他外國人の長所利點を取來れ』との意味を含めるものなり。

此昔噺誰が作りしか知らねども、兎に角、古人は此の如き意味深長の佳話を殘して、後生子孫を奬勵訓戒したるものゝ如し。然れども鎖國太平の世には、此意義を翫味するさへ叶はず、今日の父老之を知るもの甚だ少し。今や明治隆興の御代となり、列國と對峙するに至りたれば、帝國多數の桃太郎は此昔噺の意義を服膺して、君國に盡力すべき時とはなれり。蓋し桃太郎の孝道は、眞正日本流の孝道にして、忠道も亦此裡に存せり。父母の膝下に終始して二十四孝流の孝道を盡すが如きは、女子の職分、予の汝に望むところにあらず。汝宜しく桃太郎の孝道を踏んで、又一家を省慮する勿れ、云々

國の東西を問はず、時の古今を論ぜず、長年の實歷に依り、百世を大觀したる古老の敎訓する處、多くは海にありて陸にあらず、退守に非ずして進取なるが如し。今此圖に對して往事を追懷し、感慨少からず。乃ち之れと連係せるルース少將並に亡父の談話を列記し、黒船初來の圖に附すると云爾。

（明治三十三年大尉のとき水交社記事に寄稿）

黄海海戰の回想

海戰史上の不可思議なる事實――東郷大將の報告文――巧妙なる吾が策戰法――上村艦隊の動作――變則的封鎖――敵の策戰――決戰の覺悟で出港――蔚山の海戰――戰果收らず日波に沒す――海戰は大海原の鬼事――戰爭にも戰運あり

日露戰役の事蹟中で、何が一番不可思議であるかと云へば、本來約二倍の兵力を有する露國の三大艦隊が、殆んど全滅したるに反し、其二分の一に足るか足らざる日本の聯合艦隊が、大部分殘存し、剩へ戰利艦を獲て、戰役前よりも、其勢力を增加したことである。如何に皇軍の武運が芽出度

いとは云ひながら、斯んな事は、東西古今海陸の戰例に稀有、否皆無の出來事で、之を不可思議と云はなければ、此世の中に不可思議のものは無いかと思ふ。兵法の原則から言へば、當初より二倍の兵力を有する敵國に對し開戰するなどゝは、若し已むを得ざりしとは云へ、實以て大膽不敵、變則も變則大變則である。而も我海軍の此大變則が、首尾よゝ成功したのは、主として地理と時日の關係に依り、敵を二分して之を二回に攻擊するの天佑を得たからではあるが、其れにしても、我艦隊が左程の損失なく、元氣に生殘つたのが不可思議ではないか。今日より戰役當時の戰勢を回想して見ると、若し敵の第二、第三艦隊(卽ち所謂波羅的艦隊)が、三十七年中に逸早く東洋に到着するか、或は其第一艦隊(卽ち在來の東洋艦隊)が、其半分たりとも、三十八年迄長く殘存して、波羅的艦隊に合力するか、或は又此第一艦隊が、自ら全滅するも、我聯合艦隊の勢力を半減する迄に力戰したならば、何れにしても我が海軍の勝算は立たなかつたので、眞に危い事であつた。言ひ換ふれば、我海軍の勝敗は、敵の第二艦隊東來の前に、其第一艦隊を擊滅すると同時に、能く我が兵力を保全し得るや否やの一問題にて決定するのであるが、夫れが中々容易ならぬ難題である。何となれば、其兵力は我艦隊と均當で、寧ろ或點に於て優勢なる敵の第一艦隊を怪我なしに擊滅せんとするに、兩虎相搏の常識から考へても、既に不可能であるのみならず、若し其一虎の軍港要塞の穴に籠つて、地形に據られたならば、尙々六ヶ敷なるからである。而して此至難なる問題を解決して、日

露戰役の大勢を定めたのが、卽ち黄海の海戰（蔚山沖海戰及びコルサコフ灣の海戰をも含む）であると單一に言うては一寸分らぬかも知れぬが、先づ東郷大將の凱旋報告文中の左の一節を能く讀味すると、其間の消息と因果が、略々分明するであらう。

初メ聯合艦隊ノ海上ニ第一期作戰ヲ開始スルヤ、臣ハ　大命ニ基キ海陸ノ形勢ト陸戰ノ方面ヲ考察シ、敵艦隊ノ主力ヲ旅順方面ニ拘束シ、之ヲシテ浦鹽ノ要地ニ據ラシメザルヲ以テ戰略ノ主旨トシ、先ヅ旅順、仁川ニ敵ヲ迅擊シ、更ニ數次ノ攻擊ヲ重ネ、以テ漸次ニ其勢力ヲ減殺シ、又屢々冒險ナル敵港ノ閉塞及敵前ノ水雷沈置ヲ試ミ、以テ敵ノ出動範圍ヲ縮少スルニ努メ、尙ホ麾下艦隊ノ一部ヲ常ニ朝鮮海峽ニ駐メテ海上ノ要害ヲ扼シ、以テ浦鹽ノ敵ヲ監視スルト同時ニ旅順ノ敵ニ對スル第二戰線タラシメタリ。此作戰ノ前期中、敵ハ始終地利ニ據リテ退嬰ヲ事トシ、我軍連續ノ攻擊モ其成果ヲ擧グル能ハザリシガ、八月中旬敵艦隊主力ノ旅順ヨリ浦鹽ニ逃レントスルニ及ビテ、黄海及ビ蔚山沖ノ海戰ヲ見ルニ至リ期セズシテ全ク敵ノ戰略的企圖ヲ摧破シ、我作戰目的ノ過半ヲ達成スルヲ得タリ。

此記念すべき黄海海戰を回想するに先だち、一寸述べて置かねばならぬのは、此に至る迄の戰局の徑路である。前段にも述べた如く、我海軍の戰略的第一攻擊目標は敵の東洋艦隊で、長くとも波羅的艦隊の東來する迄には、是非共之を擊滅せねばならぬと云ふ、必須の要求に對し、自然に起つて來る第二の戰略的手段は、東郷大將の奉告された通り、敵をして浦鹽の要地に據らしめざることである。されば目的は敵の東洋艦隊を擊滅するに

在るが、其手段としては之を浦鹽に近けず、黃海方面に拘束して置いて擊滅せねばならぬと云ふことに結着し、其結案が劈頭第一の旅順水雷攻擊及び仁川の海戰となり、次で敵の退嬰と共に旅順閉塞の壯擧に移り、更に敵前の水雷沈置、强行封鎖等となつたのである。

當時我聯合艦隊の封鎖配備がどうであつたかと云ふと、主將東鄕司令長官の直率せらるゝ主隊が、旅順方面に在つて封鎖の第一線を成し、上村中將の分率せられた支隊が對馬海峽を扼して、遠く旅順の敵に對し（浦鹽に行かしめざる爲め）封鎖第二線を務むると同時に、浦鹽の敵支隊をも監視して居つたのである。卽ち主眼の攻擊目標は旅順に在る敵の主力で、浦鹽の小敵では無かつたのである。尙言ひ換ゆれば、浦鹽は敵を入れぬ代りに、其出るに委せ、寧ろ凡て旅順の方面に引纏めて擊滅したかつたのである。是が爲め、時々浦鹽艦隊が潛かに飛び出して、我運送船や商船に危害を加へたけれども、大局より打算して、之迄を處分すべく兵力の餘裕は全く無かつたので、實に已むを得ざる結果である。前にも言つた通り、本來の兵力は彼我均等である。海上の封鎖は陸上の攻圍と等しく、敵に倍加する兵力が無ければ完全に遂行の出來ないのが原則である。何故なれば封鎖されたものは、安閑と港內に碇泊して充分の準備を整へ、虛を見て、隨時隨所より飛出すことが出來るに反し、封鎖するものは、連日連夜延長せる封鎖線の各方面を見張らねばならぬのみか、其中には炭水の補充とか、兵員の休養とかゝ、時々交代の必要もあるからである。此原則を度外にし、同等

の兵力で變則の封鎖を强行するのだから、何處かに無理が出たり、隙が生じたりするのは致方ないことである。

其處で、一寸局外から見ると、無理に危險な閉塞や、困難な封鎖をせなくても、敵艦隊を外に逐出すか、誘き出して擊滅すれば、其目的を達するではないかの疑問も生ずるであらうが、偖て責を負うて是非之を打洩らしてはならぬと云ふことになると、敵の勝手に時を定めず飛出されては、到底必獲の成算は立たない。戰運天に在りとすれば、對等に決戰しても、勝敗の定め難い均勢の敵に對し、道筋の定まらぬ海上に廣く眼を配る譯には行かざるのみならず、一晝夜の半は敵も味方も指呼の間に相見え難き夜陰で、他の半晝も時に雨霧風雪の障礙があるのだから、萬一は愚か、二一にも敵を打洩らさぬと保證の出來やう筈が無い。若し敵の半分でも打洩らして浦鹽に入らしめ、之が修理を完成して、波羅的艦隊の到着頃に飛出されたら、之こそ皇國の興廢に關する一大事であるから、矢張り無理なる敵港の閉塞もしたり、或は敵前に機雷を沈置などして、敵の行動範圍を縮少せしめ、以て我海軍兵力の不足を補ふの外は無かつたのである。彼の決死隊の閉塞の如き、唯々之を壯絶慘絶と見たゞけでは、色を賞めて香を愛せざると同樣で、此等忠烈の勇士が、後日の戰場に我有數の艦船を保全せんが爲め、其血肉を捧げて、此處に死所を選んだ心事を讀まなければ、彼等は地下に瞑目することも出來ないかと思ふ。獨り閉塞隊のみならず、長時の封鎖勤務中に斃れた殉難の忠士も、旅順の背面に突擊したる第三軍の肉

彈的死士も、詮じ來れば、皆是れ海軍兵力の不足に代りたる、神聖なる犧牲であつた。嗚呼『古の善く戰ふ者の勝つや名智なく勇功なし』で、凡そ講釋師の軍談材料となるが如き、壯絶快絶の異彩ある戰爭は、假しそれが成功したにしても、決して萬全の善戰ではないので、多くは戰備の缺陷等に原因して、已むを得ざる必要に迫られたる不自然の結果である。史蹟を知れる者は常に能く此間の因果を翫味して、之を後日の般鑑とせねばならぬ。

思はず話が冗長な岐路に入つたが、斯の如く掛代へなのい兵力を、休みなしに精一杯に使用して、我聯合艦隊は如何にしても敵の東洋艦隊を撃滅せんとしたものであつた。然し敵もさる者にて、亦我軍と同樣に心力と根氣のあらん限りを盡して、其艦隊を保安し、隙があらば少しにても我兵力を滅殺せんとする。此打たうとする、打たれまいとする、尙反對に打ち返さうとする、其處が卽ち戰爭である。開戰以來、既に敵の四戰艦は、我水雷攻擊に大破したのであつたが、其内沈沒したのは、マカロフ中將の旗艦『ペトロパボルスク』號のみで、船渠も無い旅順で、克くも百難を排し他の三艦を修理復舊し得たのは、實に敵ながら感心せざるを得ない。之に反し、我六隻の戰艦中不幸にして『初瀨』『八島』の二艦は、敵の水雷に罹り、救濟修覆の途なくして、終に封鎖勤務に斃されて了つた。此邊が卽ち封鎖されるものと、するものと、主客攻防の利害の反する處で、封鎖兵力に倍加せざるべからざる所以である。

斯くて六月二十三日に至り、敵は兎に角全力を揃へ、或程度迄決戰の覺

悟を持して、港外に出て來たが、我封鎖艦隊が逸早く之を遮斷したるに氣壓せられて、再び港内に引返し、其時又戰艦『セバストポール』が我水雷に傷つき、其後巡洋艦『バーヤン』も同じ危害を蒙つて、敵勢に一頓挫を呈した。其間に旅順の背面に對する我第三軍の攻圍が進捗したから、敵艦隊も最早絶體絶命、此處に要塞と情死すべきにあらざれば、終に八月十日、其大本營の命令に基き、決然封鎖を破つて浦鹽に逃れんとし、再び我封鎖艦隊の遮斷する處となつて、黄海の大海戰を現出し、又之に策應して、對州海峽迄迎へに出た浦鹽艦隊が、端なくも上村艦隊に發見せられて、八月十四日の蔚山沖の海戰となり、又黄海に打洩らされたる敵の快速巡洋艦『ノービック』が、太平洋を大迂回して浦鹽に至らんとし、八月二十一日宗谷海峽附近に於て、我『千歳』『對島』の一艦に要擊されたのが、『コルサコフ』灣の海戰である。即ち開戰の當初より、一方は敵の波羅的艦隊東來前に其東洋艦隊を擊滅せんとし、他方は之を擊滅されまいとする。終始一貫せる積極消極の意氣が積り積つて火花を發する樣になつたのである。

因に一寸言うて置くが、世間では黄海、蔚山沖及び『コルサコフ』灣の三海戰を個々別々のものと思つて居る人もあるやうだが、此三海戰は本來同一の動機に由つて起つた、相關連せる海戰であるから、黄海に於ける主力の海戰を本戰とし、蔚山沖及び『コルサコフ』灣のものを支隊の支戰として、之を連續せる一大海戰と大觀するのが至當である。

如上の經路を經由して、八月十日の大海戰は黄海の一隅に起つた。其戰

場は第一圖に示すが如く、旅順の前面遇岩の附近より山東の地方、約三十浬の處に亙り、前後二回の合戰である。此日旅順の敵艦隊は早朝より先づ掃海艇隊を出し、港外の我沈置水雷を掃除して一條の通路を開き、旗艦『ツザレキツチ』を始め、戰艦六隻、巡洋艦四隻、驅逐艦八隻、舳艫相銜んで徐々に港外に現出し來り、午前十時の頃には、已に老鐵山の南方に達し、其針路を山東角に向けた。其目指す所は云はずとも知れた浦鹽斯德である。我封鎖艦隊は永の警戒勤務に飽き疲れもせで、其日も各方面の配備に就て居つたが、敵艦隊破封鎖の警報に接するや否や、東郷大將は直ちに全軍の集合を命じ、自ら第一戰隊『三笠』『富士』『敷島』『朝日』『春日』『日進』を直率して、徐に敵の前路を遮斷する如く、遇岩の南方に向はれた。是れ前回六月二十三日の對戰に鑑み、敵を洋心に引出して、再び旅順に還らしめざる心算である。

第一合戰は我全軍の集合を遂げざる前、午後一時十五分より遇岩の南方に於て、第一戰隊のみを以て開始せられたが、東郷大將の戰法は、日本海海戰の時と少しも異なる所なく、例の丁字筆法で、其當初の對勢は、第二圖に示すが如く、理想的絶好とも謂ふべきであつた。爲めに短時間の砲戰に早くも敵陣を攪亂し、著しく打擊の功果を呈して、若し之を持續し得たならば、殆んど此處に敵を擊破することが出來たのであつた。然るに午後二時頃敵の艦々相亂れて重り合へるに乘じ、我全線の掩擊急射最も激甚なりし時、第一戰隊は知らず識らず、敵の西方（卽ち旅順の方向）に廻

り込んだ。所が、敵は逸早くも此機を外さず、山東角の方に其針路を向けた。偖てこそと、東郷大將も敵に並ぶやうに隊首を轉ぜられたが、殘念、其時機が僅かに三〇分間遲れた爲め、爾後第二圖の終りの如く、我第一戰隊は敵の後方より隨進追擊するの不利なる對勢となり。先頭の『三笠』のみ絶えず、敵の集彈を蒙り、此儘にては到底戰機の發展を見る能はざるに至つた。旗艦『三笠』の大檣が其根本に連續二彈を喰つて、殆んど倒れんとしたのも、慥此時分であつた。第一合戰の戰術運動に於ける此三分の遲刻が、爾後の追及に貴重なる三〇時間を空費し、午後五時三十分に至り、漸く第二合戰を再興するを得たのである。後日に於ける黄海海戰の評論が主として、此の三分間の後れを取つた點に集中されたが、然し事後の結果を詮索して後日に批判するは容易き事で、事前に即斷して、未然に適應せしむるは中々困難である。浦鹽に逃がしてならぬと云ふことは、誰しも銘心して居りながら、又六月二十三日の轍で、旅順に引返しはせぬかと疑うて見ると、是れも亦已むを得なかつたと考へる。兎に角、此三分間が當日の戰果を少からしめた主因で、之が後日に至り、日本海々戰の教訓ともなつたのである。

斯く敵を前方に逸し、我に速力の長所なければ、何時迄經つても、之に追附くことは不可能で、假し此儘浦鹽の口元まで追驅けたとて、眼前一浬に在る敵は始終眼前一浬に居る譯である、是に於て、我第一戰隊は一時戰鬪を中止し、更に出來得る限りの全速力を發揮して敵を追拔くに力め、午後五時頃には、已に敵の南方(山在角の方向)に出で、且『八雲』其他の數艦

も來り加はり、先づ之で敵の南下する前路丈は遮斷し得たのであつたが、戰鬪を開始するには、未だ我先頭を擊壓せらるゝ氣味ありて、有利とは見えなかつた。されど斯ては最早日沒迄に時間が無いから、第二合戰は不利なる對勢の下に、午後五時三十分より開始せられ、夫より約一時間は梯行相殺の激戰が續いて、彼我共に多大の損害と死傷があつた。然るに天なる哉。命なる哉。午後六時三十分の頃。我一巨彈が敵の旗艦『ツザレウキツチ』の司令塔附近に爆中して、其主將と幕僚を倒し、且舵機を破壞した爲め、同艦は忽ち左方に旋回して、味方の隊列に突入し、敵陣立所に亂れ始めた。東郷大將は此好機を逸せず、直に敵の前方に廻り込み、猛擊急射を浴せかけたから、敵の隊制は全く崩れて、遂に支離滅裂となり、艦々互に意志の結合を失ひて、南方に逃げ出さんとするもあれば、又北に避くるもあれば、西に還らんとするものもあつた。恰も好し、其時後れて戰場に到達したる『淺間』『松島』『嚴島』『橋立』等の數艦が敵の西北方を押へて、第三圖に示すが如く、三面合擊の姿勢となり、戰鬪は茲に全く皇軍の大捷に歸したが、遺憾なる哉、未だ其戰果を收獲するに至らずして、八月十日の日は遂に全く暮れて仕舞つた。是より例の驅逐隊水雷艇隊の夜襲に移つたが、敵艦が餘りに諸方に散亂した爲め、當の敵を失ふたもの多く、會々敵の小部分を見附けて攻擊したものも、敵に逃げ廻られて的確の奏效を得なかつた。

十日の夜に入りて東郷大將は翌日の戰鬪を期して黄海を南下し、又對州

海峡に電令して、上村艦隊を此方面に呼び寄せられたが、翌朝に至り敵の過半が旅順に逃げ込んだとの報を得て、再び自ら旅順に引返さるゝと同時に、上村艦隊にも黒山島（朝鮮の南西端）附近より直に對州海峡に歸航して、擊洩したる敵艦を扼し、且浦鹽艦隊の出動に注意すべきを命ぜられた。果せる哉。八月十四日の早朝、其主力に合同の目的を以て對州海峡迄出迎へたる浦鹽艦隊が、上村中將に發見せられて、彼の蔚山沖の海峡となり、此處に『ルーリック』は擊沈せられ、他の二艦も復立つ能はざる大打擊を受けたのである。又敵の快速巡洋艦『ノーギック』は黄海より逃げ延びて太平洋を迂回し、宗谷海峡に出で、浦鹽に入らんとしたが、是亦『コルサコフ』灣で、我『千歳』『對馬』の一隊に擊沈せられた。此千歳は黄海の海戰を濟まして對馬海峡に急航し、更に日本海の捷路を經て宗谷海峡に先き廻りしたのであるが、斯な處を見ると、海戰は恰で大海原の鬼事見た樣なものである。其他殆んど航海力を失つて膠州灣に遁れたる敵艦『ツザレウキッチ』上海に避難したる『アスコリッド』、又遠く西貢迄逃げ延びたる『ヂャナ』、何れも武裝を解いて交戰より除外せられ、旅順に引返したる他の六艦も、多くは大破して、遂に其要塞と運命を供にすべきを自覺するに至つたのである。

黄海の大海戰『蔚山沖コルサコフ灣の海戰をも含む』は、斯の如くにして其終りを告げた。好し當日の戰場に於ける其直接の戰績は少かりしとは云へ、全局に對する其間接の效果は實に偉大なるものである、之が爲め、波

羅的艦隊の東來迄、其東洋艦隊の大部を保全し、以て最後の勝算を立てたる敵國の大戰略を根柢より覆滅して、戰局の大勢を確定し得たので、兵學上の見地から云へば、花々しく俗眼に映ずる日本海の海戰よりも、寧ろ其價値も趣味も多大なるかと思はれる。彼は一時に咲き揃つた爛漫たる櫻花で、此は春を破つて匂ひ出でたる梅花である。戰役の終始海上を主宰されたる東鄕大將も、其終尾の報告中に第一期作戰を結んで左の如く言はれた。

惟フニ、此期ノ作戰ハ戰勢ノ自然ニ伴ヒ、漸進微功ヲ積ミ、攻戰約十ケ月ニ亙リ、我ガ將卒ノ心力ヲ傾注シ、智勇ヲ發揮シタルコト本戰役中ニ冠絕シ、忠死ノ士、洵難ノ艦亦少カラザリシト雖モ、戰局ノ大勢ハ玆ニ初テ定マリ、爾後日本海ニ於ケル決勝ノ機運モ此間ニ萠芽シタルヲ覺ユ。

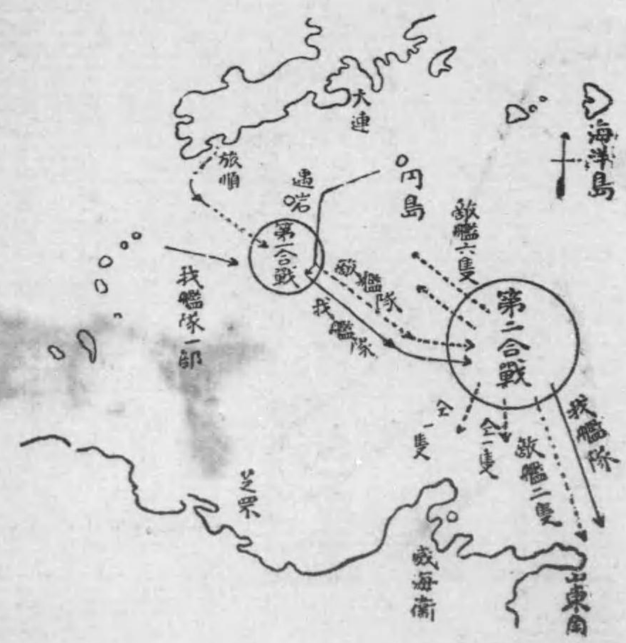
然り、敵港の閉塞と云ひ、敵前の機雷沈置と云ひ、又危險海面に連日の封鎖勤務と云ひ、何れも尋常一樣の覺悟や工夫で出來た仕事ではなく、我海軍の將卒が極度迄其心力を傾注し、智勇を發揮したには相違ないが、如何程心力を盡し智勇を絞り出したとて、必ず戰爭に勝てると定まつたものではない。百般の人事と等しく、戰爭にも戰運なるものがあつて、完全無缺に仕組まれても、矢張り人間業だから、意外の邊に思はぬ蹉跌や齟齬を來すことのあるものである。されば古人の言ふた通り、之を謀るは人に在り。之を成すは天に在りで、玆に述べた黄海海戰の如きも、此天則には洩れないと考へる。後より回想して見ると、若し其第一合戰中、敵彈に九分九厘迄打破られた『三笠』の大檣が舷外に倒れ懸つたならば、我速力は減

り、隊列は亂れて、迚も敵に追ひ付く事は出來ず、對洲海峽に上村艦隊が居たにしても、其浦鹽に入るのを喰止めることは覺束ない事であつた。或は又其第二合戰中、敵の司令塔を破つた怪彈が、反對に我『三笠』の艦橋に中つたならば、其日に於ける勝敗の現象は彼我轉倒して居つたかも知れぬ。之を唯々砲術の巧拙と云へば夫迄だが、現時の人智で作り出した大砲は、一分一厘狙ひ違はぬ樣には出來て居らぬのだ。斯の如きが卽ち戰運で、吾人は何處迄も皇軍の天佑を確信せざるを得ない。左なくとも、黃海の海戰は本來對當の決戰で、敵の戰艦六雙に對し、我は戰艦四雙に巡洋艦を加へて對抗したのだから、假令腕に覺えがあつたとしても、敵を全滅する代りに、我も半滅はせなければならぬ勘定である。此時若し敵を全滅し得て、我艦隊の三隻も失ふたとすれば、後日波羅的艦隊の來た時に、之に對する我戰艦は唯の一雙であつたのだが、今日考へて見ると實以て危險千萬な大投機である。それでも人間は中々慾の深い者で、其當時吾人は如上の戰略的大勝利を獲たる上にも、尙ほ戰場に敵を擊洩らしたのを心から殘念に思うて居た。處が後になつて見ると、旅順に逃がした敵の六大艦は、其陷落の後我手に浮上り、戰役中に亡失した我海軍兵力を補足して餘りあつた。最早此に至つては、全然天爲で、吾々人間には何が善いやら惡いやら少しも分らなくなる。斯くて最終の決算が初頭に述べ置いた通りに、兵力二倍の敵國海軍を殆んど全滅した我海軍が、却つて戰前よりも稍々兵力を增したのである。之を不可思議と謂はなければ、此天地間に不可思議はなから

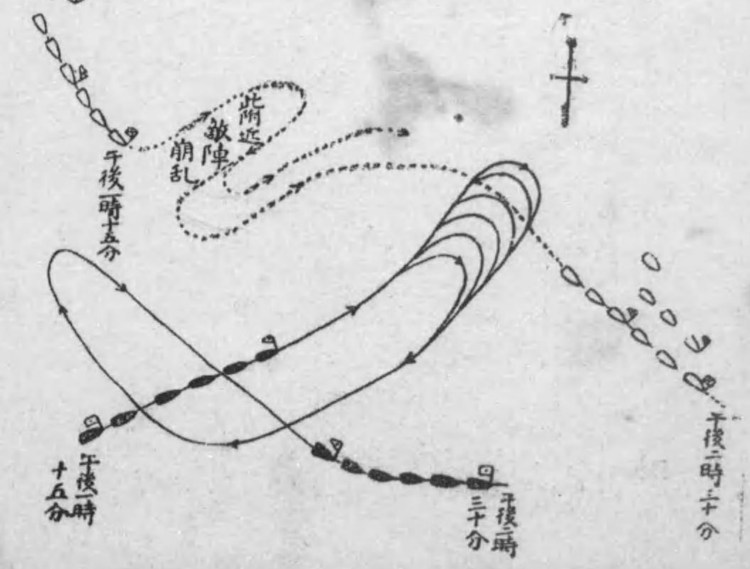
う、又此不可思議を左程にも思はず、戰後の國民が存外天命に安んじて居るのも、實に不可思議中の不可思議である。戰役の當年京童の川柳に『號外は旗出す事と下女思ひ』と云ふのを聞いたが、之は一面に皇軍の武運芽出度きを表彰せると同時に、又他方には國民の暢氣さ加減をも證明して居るかと思ふ。天佑の有無を度外に措いて、其局に當る者は、一生懸命になつても、未だ成算の立つものではないのだ。嗚呼神國は、何處迄も、不可思議で、何時迄も芽出度き御國なる哉。

（大正二年八月）

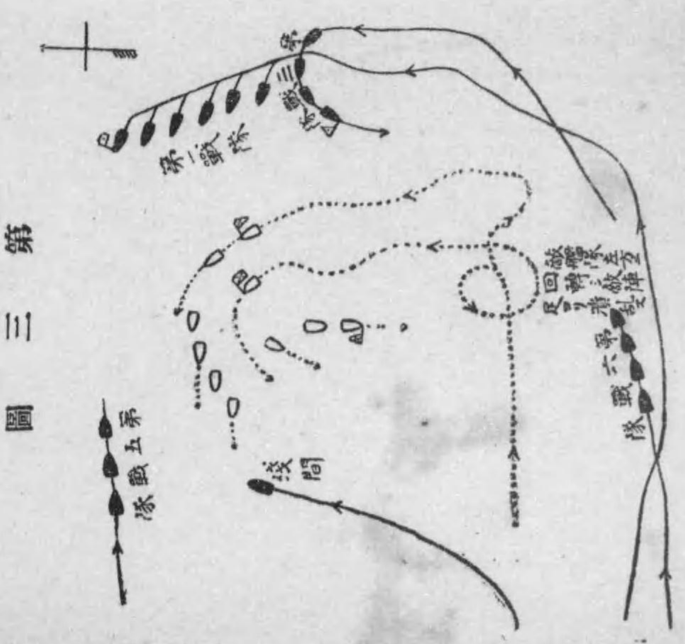
第一圖



第二圖


午後一時十五分
敵陣崩乱
附近
午後一時十五分
午後一時三十分
午後二時十分

第三圖

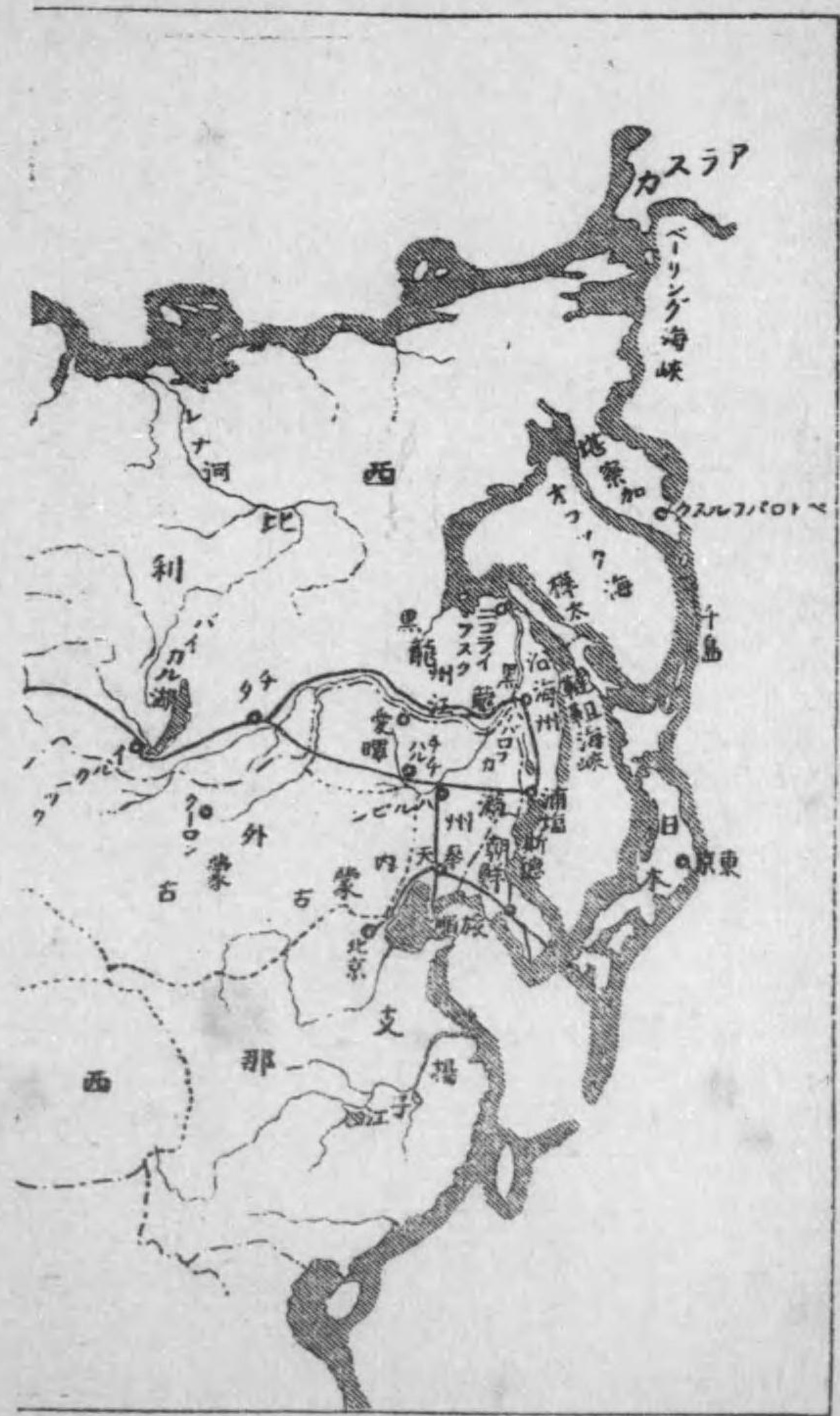

第五隊
淺間
第三戰隊
第一戰隊
敵回航艦隊左方ヨリ再ビ敵陣ニ向フ
第六隊

露國の北亞經略由來

露國の對亞細亞經營――ベーリング海峽の發見――露の南下――米英佛のカムチヤツカ經營――樺太を半島なりと信ず――樺太日本の手より離る――露清の交渉――樺太千島の交換――露帝の巡幸と歐亞貫通鐵道――日清役の漁夫――露の東亞策頓挫――今昔一轍

此の一篇は十數年前、秋山少將（當時中佐）が、東亞露領の紀要を記述さるゝに當り、八代海軍中將（當時少將）の沿海州視察紀行等に據り、露國東方經略の沿革を略敍されたるものにて、茲に拔萃せるものは、今日滿蒙等の問題を討究する人、必ず先づ之を知るの要あるを以てなり。

北亞西比利亞の地、廣袤九十萬方里、其北部大半は凡て氷雪の野、豺狼の窟、唯だ南方一帶、治化を知らざる蕃族の水草を負うて轉居したるに過す


アラスカ
ベーリング海峡
ペトロパウロフスク
オホーツク海
樺太
千島
西比利亞
レナ河
バイカル湖
チタ
イルクーツク
外蒙古
内蒙古
北京
支那
西
揚子江
日本
東京

諾威
瑞典
露西亞
ペトログラード
モスコー
オビ河
エニセイ河
トボルスク
オムスク
トムスク
クラスノヤルスク
ボルガ河
黒海
土耳其
裏海
鹹海
タシケント
サマルカンド
東土耳其斯坦
波斯
阿富汗
西藏

ぎず。昔者、成吉斯汗其一世の雄圖を亞歐の大陸に擴張せし以來、此の大地域は未だ一定の領主たるものなく、西曆千五百八十二年（天正十年）の比、露王ソリマン、東歐の强族『カサック』の慓悍制し難きを利用して、東の方西比利亞の蕃群を征せしめ、『カサック』の頭領エルマーク其武力を以て、地を北亞の西半に略し、『オビ』河畔に露西亞の國旗を樹て、夫の曠漠たる西比利亞の山野は茲に始めて露國の版圖に歸せり。

其後千六百四十年より八十年に至る間、露國東領の經營稍々其緒に就き冒險の士投機の徒相踵ぎて東方遠征に努力し、向ふ處沿道の蠻地を占略し、櫛風沐雨、地を開き路を作り、漸く進んで終に痾哥德斯科海濱に達し、甫めて極東太平洋岸に出づるを得たり。然りと雖も、土地僻遠にして交通阻絶し供給續かず、邊境の屯戍數々清兵の攻掠に苦み、僻陬の蕃族尙ほ普く治化に服せず、露國未だ何等の利する所あらざりし。

彼得大帝位に卽くに及んで、鋭意土壤の開拓領民の統治を圖り、創めて露領亞細亞に西比利亞縣を設置し、其首府を『トボリスク』に建て、以て施政の端を開き、加之當時歐露多事なるに拘らず、尙ほ東洋に於ける通商航海移民拓殖を奬勵せしを以て、露人陸續堪察加半島に轉住し、千島上部の諸島亦其占領する所となれり、是れ實に千七百十六年（享保元年）乃至二十年の事なり。大帝崩殂の後、女皇エカテリーナ第一世又其の遺志を繼ぎて、國是の宿謀を果さんと欲し、千七百二十五年（享保十年）ベーリング なる者に極東探檢の命を授く、ベーリング乃ち探檢隊に長として東洋沿海に航し、千

七百三十三四年の交、已に堪察加『アリユーチャン』群島及北米『アラスカ』地方の一部を略取し、尋で千七百四十九年(寛延二年)に至り、夫の有名なる東亞北米間に横はる一大水道を發見せり。『ベーリング』海峡即ち是なり。其後露國は西比利亞を分つて數縣となし、更に之を東西の二大部とし、各部に總督府を措き、且つ東領防備の爲め痾哥斯科港に守廳を創設し、衞戍を駐屯して東亞の北隅を警備せしと雖も、痾哥德斯科海岸地味不良にして耕種果なく、供給屢々絶えて糧資常に窮乏を告げ、加之風土惡卑濕にして棲住に適せず、惡疫又斷ゆることなく、邊陲の守廳遂に廢滅に歸するの已むを得ざるに至れり。是に於て、海陸有爲の士漸く眼を南方に轉じ、數々南下して地を黑龍江岸に獲んと企圖せしと雖も、當時北清邊境の武備優勢にして容易に其の志を得ること能はず、經營歩を停めて空しく數十星霜を經過せり。

降つて今世紀に入り、英、佛諸國の艦船漸く極東に出沒して、數々露領沿岸を覬覦し、領海の巨利常に外人の横奪する所と爲るを以て、千八百四十九年(嘉永二年)地を堪察加半島の東南岸『ペトロパブルスク』港として、此に堪察加沿海地方廳を設置し、水陸の守衞を屯戍して沿海の警備を嚴にす。是時に當り、露國海軍少佐ネウエーリスコイ圖南の深謀を抱き、自ら奮ひて運送船に長とし、『ペトロパブルスク』港を發して船を黑龍口に寄せ、更に進んで韃靼海峡を南過し日本海を出で、再ぴ同海峡を經て痾哥德斯科海に歸航し、積年航客の樺太を目して一大半島と認めたる謬見を覺破し、

後年露國が沿海州に志を逞くするの端緒を開き、而して之を露廷に具狀したるに、當時在廷の有司多くは時勢に通ぜず、之を排斥して妄談虛說と爲せり。是より先き當時の露帝ニコライ第一世大祖彼得大帝の籌策に遵ひ、深く意を東方經略に傾け、（千八百四十一年）陸軍中將ムラヴヰヨクを擧げて東部西伯利亞總督に任ず。將軍任に赴きて以來、潛心焦慮北淸滿洲內部の形勢を審査し、其の蠶食を貴する已に年あり。是に於てネウエーリスコイ乃ら自ら請うて東部總督の麾下に屬し、命を奉じて再び黑龍江口に航し、漸く上流に溯り、『クエーグト』岬頭に甫めて露國の國旗を樹て、之に『ニコライスク』軍港の名を命じ、黑龍江口より朝鮮國界に至るの沿岸陸地及び近海諸島嶼、悉く露帝の領有たるを告示す。是れ實に千八百五十年八月（嘉永三年）なり。此報道の露京に達するや、廟議ネウエーリスコイの壯圖を認めて輕擧淸國に對し釁を啓くものとなし、却て其の罪を鳴らすに至れり。蓋し當時露廷の對淸政策因循姑息唯だ徒に破綻を懼れたるが如し。然るに露帝ニコライ一世の烱眼能く氏が勇略義擧を看破し、衆論を排斥して敕して曰く、一旦吾が旗章を樹立す、焉ぞ之を降す可けんやと。益益進んで圖南の籌策を畫せしむ、於是ムラヴヰヨク將軍等營々怠らず、先づネウエーリスコイをして『ニコライスク』港に立脚の根據を建立せしめ、幾くもなく日本北邊の治及ばざるに乘じて、千八百五十一年（嘉永四年）樺太島の北部を占奪し、以て現時の黑龍沿海州併呑の基を成せり。

千八百五十三年（嘉永六年）露土兩國兵を歐洲に交へ、英佛の二國同盟し

て土耳其を援け『クリミヤ』戰役の起るに際し、英艦數々來りて『オコツク』海を侵す。『ペトロパブルスク』の海鎭頗る其防備に苦むと雖も、奈何せん地位遼遠交通阻隔せらるゝを以て、ムラヴヨフ總督益々黑龍の水路を占め西比利亞本部とオコツツク海岸の連絡を確實ならしむるの必須を感じ、之を露帝に奏請す。帝直に之を嘉納し、將軍に委ぬるに黑龍江經略の機宜專裁の全權を以てす。是よりムラヴヨフ將軍北清の虛に乘じて着々機宜を制し、數々兵を率ゐて親ら黑龍江岸に遠征し、千八百五十五年北海の守廳を南方『ニコライスク』港に移し、玆に海陸兵備の根據を確立し、江岸の要地到る所屯戍を駐め、且つ僧侶を派して布敎を努め土人をして露敎に化せしめ、黑龍江の左岸に於ける露國の勢力遂に動す可らざるに至り、

續いて清國との交渉始まる。千八百五十七年(安政四年)の愛琿定界談判是なり。愛琿條約は、主として當時の駐清公使ブーチヤチン及びムラヴヨフ將軍の權略に成り、之に依りて黑龍江北岸一帶の地露領に歸し、烏蘇里江口東韃靼海峽に至るの地は露清兩國共管雜居の地と爲し、黑龍口上露國の位置は名實與に愈々確定せり。幾くもなく、清國英佛と釁を啓き、英佛の聯合軍大擧北清を侵す。曾々露國特命全權大臣イグナチフ愛琿條約を交換して尙ほ清京に在りしが、清軍數々利を失うて清國の形勢漸く非なるに乘じ、巧に三國の間に周旋して講和の盟約を北京城下に結ばしめ、更に自ら清廷と商議し、千八百六十年(萬延元年)愛琿條約を改訂して所謂北京條約を締結せり。此條約に據り、又滿洲全岸一帶(今の沿海州)悉く露

國の版圖に歸し、西は烏蘇里河を隔て廣く吉林の地を包圍し、南は圖們江に至りて土壤を朝鮮に接し、新に沿岸數多の佳港良灣を領し、露國が東力に覇權を伸張するの門戸を開き、東亞立脚不拔の地全く定まる。爾來歐亞海路の交通を盛にし、以て拓殖移民の增進を圖り、千八百七十二年北方不便の凍港『ニコライスク』を棄てゝ、南方形勝の良港浦鹽斯德に海鎮を移駐し、益々邊境沿岸の防禦を嚴にす。尋て千八百七十五年(明治八年)日本と通商條約を訂結し、更に樺太南部と千島諸島を交換し、以て沿海州の前面に横はる天然の牆壁を占獲し、堪察加半島痾哥德斯科沿岸近海諸島と共に一括して之を露領沿海州と總稱す。現時の黑龍州及沿海州卽ち是なり。

千八百八十四年(明治十七年)陸軍大將男爵コルフ新に東部西比利亞總督

に任ぜられ、其翌年東部總督府を黑龍烏蘇里兩大江の交點哈巴羅夫加に移し、尋で千八百八十八年東部西伯利亞管區より後貝加爾州、黑龍州及び沿海州を分割して沿黑龍江管區を新置し、コルフ將軍をして更に之に總督たらしむ。是れ蓋し東方諸邦に隣接する新獲の領土を開拓し、兵事民政を擴張し以て將來に備へんとするに外ならず。コルフ將軍其任に就きてより、能く新領守成の方針を定め、先づ風土人情等を審査して拓殖移民の諸法を畫し、沿岸の航海を奬勵して交通の利達を計り勵精盡力すること十有餘年、其成績見るべきもの甚だ多く、太平洋岸混沌不毛の蠻地は漸く化して人烟稠密の豐土とならんとするに至れり。若し夫れ沿海州創業の功を以てムラヴヰヨフに歸するときは其守城の力はコルフにありと謂はじるべからす。

千八百九十一年(明治二十四年)今帝ニコライ第三世未だ儲貳にあるとき、親ら此地に巡幸して深く東領開進の迅速なるを嘉賞し、尙ほ將來の發達を奬勵し、同時に歐亞大鐵道の東端起工式を擧行す、此大鐵道の建設は卽ちコルフ將軍の建議する所にして、東西兩端より其工を起し、今や完成開通して東洋に於ける外交通事、通商の關係を一變し平戰兩時に於て露國が享得する便益の大なること言ふを俟たず。

千八百九十四年(明治二十七年)コルフ將軍哈府總督府會議開會中遽に病を以て沒す。莫斯科總督府參謀長陸軍中將ヅホウフスコイ後を襲ひて總督となり、亦能く前總督の遺籌に遵ひ、着々其希圖の完成を計り、徐々根本の實力を培養し、以て國是の遠謀を果さんとするに汲々たりし。

同年夏朝鮮の事ありて、日淸兩國難を構へ、戰爭越年淸軍每に敗れ、遂に遼東、臺灣の地を割きて和を復せんとするや、露國乃ち佛、獨二國と同盟して其の和議に干涉し、日本をして遼東戰獲の地を還附せしめ、淸國に好意を陽表し、巧に之を說きて西比利亞鐵道の一部をして淸領滿洲の平野を通過せしむるの特許を得たり。所謂東淸鐵道卽ち是なり。蓋し西比利亞鐵道の東部、北滿の境上に接する部分は線路彎長工事澁滯せるを以て、之に由りて露國が享有する處の利益は、歐亞鐵道進工の難及距離の長さを輕減すると共に、其竣成利用の期を早め、且つ北滿地方豐裕の物資を以て窮乏の露領に供給し得るにあり。加之千八百九十八年(明治三十一年)に至り、更に淸國に强請して關東半島を租借し、曩に日軍が其の生血を以て攻

略したる旅順口に大軍港を建立し、又之に隣接せる大連の大商港を開設し東清鐵道の支線を一直線に哈爾賓より旅順口に急設し、急轉直下の勢を以て北清に對する圖南發展の鋒鋩を實現せり。而かも清國の軟弱之を阻止するの實力なきに乘じ、更に進んで滿洲を占略せんとし、遂に日本の抗道に遇ひ、和議に整はずして千九百〇四年（明治三十七年）の日露戰爭となり、海陸の交戰終始利あらず、翌年米國の仲介に依り長春以南、南滿洲に於ける既得權及樺太の南半を放棄して日本と復和し、爲めに多年企圖したる東亞の經營に一頓挫を來せり。是れ獨り露國の興隆史に於ける一大記念たるのみならず、世界の開明史に於て西潮の東風に逆壓されたる特筆事件なりとす。然れども露國古來の宿謀は決して此一挫折を以て停息すべきにあらず。或は其方向を轉換し又は其前進を休止することあるも、是れ唯一國の現象にして、內に活動の實力を蓄成し外に乘ずべきの機會を發見するに至れば、再び捲土重來すべきこと今昔一轍なるべし。

以上は露國の東亞經略に關する梗概の來歷なり。之を終始讀味するときは、其の遠大なる企圖慘憺たる經營に於ける露國君臣の堅忍不撓なるを感ずると同時に、其の圖南東略を籌るの精且つ巧なるに驚かざるを得ず。接壤對岸の邦國深く既往に鑑みて將來を警めざる可からず。

日本海々戰の回想

數字上の優勢と實戰果——皇軍の興廢此の一擧にあり——十年錬磨の功も用ふるは僅に卅分間——過去の海戰は皇軍の大捷に歸した——超弩級の時代——火繩銃でも竹槍でも——末來の海戰は十五分間の勝負

日本海の大海戰は、之れに參加したる對抗兩艦隊の兵力が多大なりしと、其勝敗の差隔が著しく懸絶して、露國艦隊の、殆んど全滅したるに對し我が日本艦隊の損害が過少なりし點より見て、空前の一大海戰であるが、又其の戰場の頗る廣大なりしと、戰鬪時間の甚だ長かりし點に就いても、

古今未曾有と謂ふべきである。實に此海戰は、當年五月二十七日拂曉の頃、哨艦信濃丸が二〇三地點に敵艦隊を發見したるに始まり、對馬海峽より鬱陵島（松島）附近に至る約三百哩の大海里に於て、翌二十八日の黃昏過ぎ迄二日間に亙り、晝夜連續、各方面に戰はれたるもので、此に掲げたる海戰全圖に示すが如く、其の間彼我艦艇の砲火を交はへたる合戰は、大小十ケ所に散在して居る。（第一圖）今其戰跡を此海戰圖に據り辿りて見ると、大要左の通りである。

日時	合戰	對勢	戰果
二十七日午後	第一合戰	彼我主力艦隊の大決戰	敵艦七隻擊沈 內假裝巡洋艦三隻
同日夜	第二合戰	我全驅逐隊水雷艇隊の敵の敗殘艦隊に對する强襲	敵艦四隻擊沈 我水雷艇三隻沈沒
二十八日朝	第三合戰	我軍艦千歲の敵驅逐艦に對する追擊敵	驅逐艦一隻擊沈
同午前	第四合戰	我主力艦隊の敵敗殘艦隊に對する包圍攻擊	敵艦四隻捕獲
同午前	第五合戰	我軍艦「音羽」「新高」の敵艦「スピエトラーチ」に對する追擊	敵艦一隻擊沈
同午前	第六合戰	我軍艦「新高」「叢雲」の敵驅逐艦に對する追擊	敵驅逐艦一隻擊沈
同午前	第七合戰	我驅逐「不知火」及「第三十六號」艇の敵驅逐艦に對する追擊	敵驅逐艦一隻擊沈
同午前	第八合戰	我軍艦「磐手」「八雲」の敵艦「ウレヤコツフ」に對する追擊	敵驅逐艦一隻擊沈
同午後	第九合戰	我驅逐艦「漣」「陽炎」の敵驅逐艦に對する追擊	敵驅逐艦一隻捕獲 敵將生擒
同夕日	第十合戰	我第四戰隊及第二驅逐艦隊の敵艦「ドンスコイ」に對する追擊	敵一隻擊沈

此一大海戰を組成せる十合戰の要領は、先づ斯んなものであるが、尙ほ各合戰を比較して、其の對勢と戰果を計査して見ると、頗る興味があると考へる。此の海戰、大は大なりと雖も、彼我對等の決戰とも認むべき合戰

は、唯だ單に二十七日午後の第一合戰のみで、第二合戰より第十合戰迄の九合戰は、何れも我が優勢を以て、敵の劣勢に當り、大抵其勝敗も、瞬く間に決して居る。而も其戰果に就て見ると、第一合戰では、僅に敵艦七隻（内假裝巡洋艦三隻を含む）を擊沈し得たのみで、殘餘の敵艦十隻擊沈、五隻捕獲の大仕事は、皆第二合戰以後に於ける敗殘の敵艦隊に對する追擊戰を以て仕遂げられたのである。之を以て見ると、戰勝の正味の結果は、花々しき決戰の時よりは、決戰終りたる後の追擊戰にて獲得せらるゝことが分ると同時に、矢張り數字上の優勢を以て敵に對すれば、容易く敵を壓倒することが出來るといふことも、證明せらるゝかと思ふ。然しながら、此當初の第一合戰に於ける對等の大決戰に、當日の勝敗を決し得たことが、此海戰の大眼目とも謂ふべきもので、若し此肝腎なる決戰に勝を制することが出來なかつたならば、第二合戰以後の大戰果も擧らぬのみか、却つて苦戰惡鬪を續行して、我が損失を增大するの惡果を生じたのである。故に海戰に於ては、初めより優勢を以て敵に對するか、或は當初の決戰に勝を制すると云ふことが至極肝要である。

日本海の大海戰に於ける、我が軍の大捷は前述の如く、實に其第一合戰の決勝より生み出されたものである。然らば此第一合戰其物は、如何に戰はれて、如何に勝敗が決したかを討究するのも、亦趣味あることゝ思はれる。此第一戰は、五月二十七日午後一時五十五分、我が聯合艦隊司令長官東郷大將が、彼の紀念すべき『皇國の興廢此の一戰に在り各員一層奮勵努

力せよ』の訓令信號を掲げ、我が主力たる第一及第二戰隊を率ゐて、敵前に邁進された時に初まり、夫より連續攻擊を續行し、日沒に至りて息みたる約五時間の合戰で、其戰場は對馬海峽沖の島の北方である。去りながら此第一合戰も、亦其過半は追擊戰で、其決戰の決戰たりし正味の部分は、僅かに當初の約三十分間に過ぎない。日本海々戰の勝敗が、僅々三十分間で沈着したと云へば、或は驚く人があるかも知れぬが、夫れが眞正の事實に相違ないので、東鄕大將の海戰々報にも、明白に其事が記載してある。今此戰報を取出して、其の初めの方を見ると、左の一節がある。

敵の先頭部隊は我第一戰隊の壓迫を受けて稍々其の右舷に轉舵し、午後二時八分彼より砲火を開始せしかば、我は暫く之れに耐えて、射距離六千米突に入るに及び、猛烈に敵の兩先頭艦に集彈せり。敵は之れが爲め、益々東南に擊壓せらるゝもの、如く、其の左右兩列共に漸次東方に變針し、自然に不規則なる單縱陣を形成して、我と併航の姿勢を執り、其の左翼列の先頭艦たる『オスラービヤ』の如きは、須臾にして擊破せられ、大火災を起して戰列より脫せり。此の時に當り、第二戰隊も既に盡く第一戰隊の後方に列し、我が全線の掩擊砲火は射距離の短縮と共に益々顯著なる效果を呈し、敵の旗艦『クニャージ、スウォーロフ』二番艦『アレクサンドル』三世も、大火災に罹りて戰列を離れ、敵の陣形愈々亂れ、後續の諸艦亦火災に罹れるもの多く、其の騰煙西風に靉きて、忽ち海上一面を蔽ひ、濛氣と共に全く敵影を包み、第一戰隊の如きは、爲めに一

時射擊を中止せるの狀況なりし。又我軍に於ても各鑑多少の損害を被り、『淺間』の如きは後部水線に近く三彈を受けて舵機を損じ、且つ浸水甚しく、一時止むを得ず列外に落伍せしが、幾くもなく應急修理して、再び戰列に入れり。之れ午後二時四十分に於ける彼我主力の戰況にして、勝敗は既に此の間に決せり。

此の戰報の通りに、敵の艦隊が、初めて火蓋を切つて砲擊したのが、午後二時八分で、我が第一戰隊が、暫く之に耐えて、應戰したのが三四分後れて、二時十一分頃であつたと記憶して居る。此の三四分に飛んで來た敵彈の數は、少くとも三百發以上で、夫れが皆我が先頭の旗艦『三笠』に集中されたから、『三笠』は未だ一彈をも打出さぬ内に、多少の損害も死傷もあつたのだが、幸に距離が遠かつた爲め、大怪我はなかつたのである。是より後の戰況は、口筆を弄するよりも、左に掲げたる第一合戰の二對勢圖を見るのが、最も早く分かる。即ち一は午後二時十二分、戰艦隊が砲擊を開始して、敵の先頭二艦に集彈したる刹那で、又他の一つは午後二時四十五分、敵の戰列全く亂れて、勝敗の分れた時の對勢である。其の間實に三十五分で、正味の處は三十分に過ぎない。然し未だ此の時には、敵艦隊一隻も沈沒して居らぬのだ。（第二圖、第三圖參照）此の對戰に於ける彼我主力の艦數は、双方共に十二隻であつて、我は戰艦四隻、裝甲巡洋艦八隻。彼は戰艦八隻、裝甲巡洋艦一隻と、裝甲海防艦三より成り、其勢力は、略ぼ對等であつたが、唯較や我軍の戰術と砲術が優れて居つた爲めに、此

決勝を贏ち得たので、皇國の興廢は、實に此三十分間の決戰に由つて定まつたのである。然し、戰術とか、砲術とか、或は勇氣とか、膽力とか云ふものゝ、矢張り形而下の數字的勢力は爭はれぬもので、若し此對戰に於て、我海軍が十二隻の主力戰隊を戰線に出すことが出來なかつたなれば、此の勝敗は未だ孰れとも云へないのである。實に此戰線に參加したる我が裝甲巡洋艦『日進』『春日』の如きは、開戰間際に伊太利より購入せられ、開戰後に我が國に到着したのであるが、若し此二艦が無かつたなればと想ふと、吾人は今日も尙ほ戰慄せざるを得ない。獨り『日進』『春日』のみならず、『三笠』にあれ、『敷島』『朝日』『富士』にあれ、我は『出雲』『磐手』『淺間』『常磐』の如き、何れも我海軍の當局が、多年の慘憺たる經營に依りて製艦されたもので、而も之を用ふるは、主として僅々三十分の決戰であつた。吾人が十年一日の如く、武術を攻究練磨しつゝあるものは、亦此三十分間の御用に立つ爲めである。さればこそ、決戰は僅かに三十分であるが、之に至らしむるには、十年の戰備を要するので、卽ち取りも直さず、連綿十年の戰爭である。吾人は素より至尊の御威德が、直接關接に戰勝の大主因を成し、皇軍には常に天祐神助あるを確信するものであるが、さりとて、吾々臣民が、人事を盡さずして、神靈の加護を仰ぎ得らるべきではないと考へる。

過去の大海戰は、斯くして皇軍の大捷に歸したが、未來の海戰は、如何なる結果を呈するであらうか。今や『三笠』『敷島』の如き當時の戰艦は、既に全盛を過ぎて、舊式と化し去り、所謂『ドレッドノート』級、若しくは超

弩級ならざれば、軍艦にあらずと謂ふ時代となり、我が海軍には、現在『ド』型として、『河内』『攝津』の二隻、準『ド』型とも算ふべき『安藝』『薩摩』の二艦あるのみである。之に在來の舊式戰艦を加へて、兎に角にも、戰列の第一線を作りたいのだが、却つて速力などに差異があつて不利益である。吾人は勿論火繩銃でも、竹槍でも、與へられたる武器を以て極力奮鬪し、唯斃れて後已むのが本分であるから、敢て彼れ是れと道具選みをする譯ではないが、過去の經驗より將來を忖度すると、如何にしても、皇國の興廢が氣に懸つて、安んぜざる處がある。日本海々戰の決戰は、三十分間で片が付いたが、武器の進歩したる未來の海戰は、十五分間で勝敗が決するであらう。

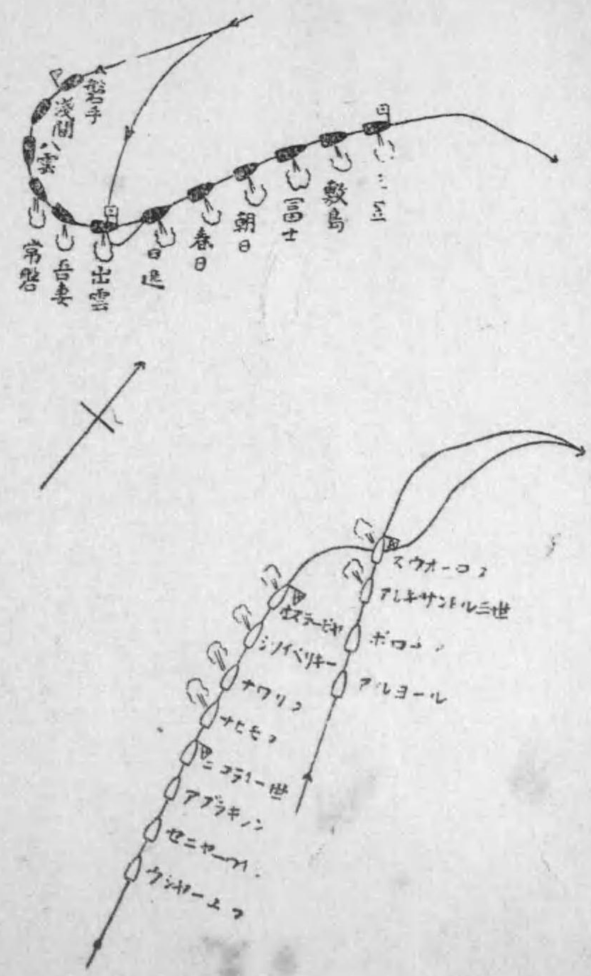
（大正二年五月）

第一圖

日本海海戰全戰場

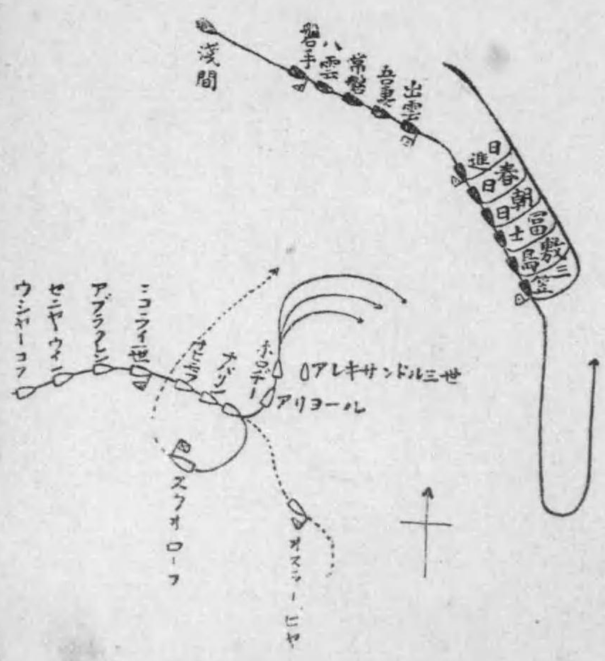
第二圖

午後二時拾二分の對勢



第三圖

午後二時四十五分の對勢



海軍補充の近況

補充は補充なり、擴張は擴張也――艦齡の三期――日本の見本艦隊――一戰術單位
と五十萬噸說――兵器の進步と補充の必要

此の數年の間、我歷代の海軍當局に依り、終始一貫して年々要求せられ、而かも尙ほ其の完結を見ざるは海軍の補充である。此の補充の意義に就ては、往々世間に誤解せれ、我海軍の當局が、補充なる名目の下に海軍擴張を行つて居るかの如く、邪推せる人士も少く無いやうであるが、讀んで字

の如く、補充とは缺損亡失を補充する用語で、毫も擴張の性質を帶びたるものではない。卽ち海軍の補充は其本體たる、艦艇の缺損亡失を補足し、永遠に一定の兵力を維持するの趣意で、其の補充の標準となるべきものは、艦艇の常備隻數と、艦艇各個の存續年限卽ち所謂艦齡とである。人間に壽命ある如く、軍艦にも亦其保存期限があつて、年月の經過に伴ひ次第に老朽し、終に廢艦となつて消滅するのみならず、時には戰鬪災厄等の原因より、艦壽を全うせずして中途に死亡するものである。此の廢艦亡艦等を補充せざれば、海軍は或る年月の後に全滅して、跡片も無くなるのは云ふ迄もないことで、其處に海軍補充の必要が起るのである。我海軍に於て左の艦齡は、二十五年としてある（他列國の艦齡は大抵二十年）此の二十五年を三期に區分し、最初の八年間が海齡第一期、次の八年間が第二期、最後の九年間が第三期となつて居つて、之れを終れば廢艦免役となること、恰も陸軍にて現役、豫備役、後備役を了れば兵役免除となると同樣で、唯だ海軍では艦船を本位とし、陸軍は人間を本位としてある丈けの相異である。然らば海軍の補充は如何なる方法に依りて施行さるゝと云ふに、是亦陸軍に於ける新兵補充と等しく、年々若干の新艦を建造し、之を艦齡第一期（卽ち陸軍の現役に相當す）の艦籍に編入すると同時に、在來の第一期艦中より年限超過のものを第二期（卽ち豫備役）に編入し、艦齡滿期卽ち二十五年を經過したるものは、廢艦となつて退役となる次第である。卽ち海軍の補充は、陸軍の新兵補充と同一原則に據れるものにて、決して擴張又は增兵

の性質を有するものでない。故に若し此の年々の新艦補充を怠るときは、海軍の勢力は漸次に減耗して、二十五年の後には全軍悉く零無に歸し、唯だ艦殼檣片の形骸を止むるに過ぎざるものとなる譯で、其補充が遲るゝ丈け、其れ丈け其期間に於ける國防力の缺損を增大し、外國に對し、一時國家を異常の危險に陷らしむると同時に、數年に積み重なりたる補充艦艇の多數を一時に建造するには、國庫の支出に急劇の增加を來すのみならず、內地の製艦力にて、之に應じ切れざるを以て、多額の製艦費を國外に投費するの已むを得ざる結果を來すのである。去れば、海軍補充は、原則として陸軍の新兵補充と同樣に、年々歲々間斷なく之を續行し、常に一定の兵力を充實して、國防上寸毫の缺陷なからしめねばならぬもので、決して長年月の間に溜りたる多大の缺損を、思ひ出した樣に一時に補充するものではなく、又到底一時に補充し得らるゝものでもない。

回顧すれば日露戰爭の當時に於て、我が海軍は實に左の如き艦齡第一期の新鋭艦艇を揃へて居たのである。

一、戰　　艦　　六隻
二、裝甲巡洋艦　　八隻
（備考）開戰の際臨時に購入したる日進春日の二艦を含む。
三、輕巡洋艦　　七隻
四、驅逐艦　　二十四隻
（備考）戰時中に新艦十六隻を急造し戰役中に竣工し四十隻となれり。

五、水雷艇　六十二隻

之等艦齡第一期の新艦卽ち陸軍で云へば、年少氣鋭の現役兵が、東郷大將統率の下に、聯合艦隊の主力となつて、戰列第一線に立つことを得たから、我に倍加せる露國の海軍を前後二回に攻擊して殆んど之を全滅し、以て帝國を泰山の安きに置いたので、我國民は彼の戰勝を祝すると同時に、彼の新鋭艦艇を能く充實し得たる、我が海軍先輩の功勞を記念せねばならぬ次第である。然るに爾來年月を經ると共に、當時の新鋭艦艇も漸次艦齡第二期又は三期に入りて、豫備後備の役となり、而かも現役新兵の補充が充分に續かざる爲め、十年後の今日(大正三年)に於ける艦齡第一期の艦艇は、實に左の如き少數に減退したのである。

一、戰　艦　四隻(薩摩、安藝ヲ含ム)

二、巡洋戰艦　五隻(鞍馬、伊吹、生駒ヲ含ム)

三、輕巡洋艦　四隻

(備考)　右の內戰艦、巡洋艦、輕巡洋艦各一隻は、將に艦齡第二期に老入せんとしつゝあり。

四、驅逐艦　七隻

五、水雷艇　〇

六、潛水艇　六隻

(備考)　今日の巡洋艦は、從前の裝甲巡洋艦の立場を取り、又潛水艇は水雷艇に代りて海岸防禦の任に當ることゝなれり。

戰列第一線に立つべき、艦齡第一期の艦艇が、斯く不足し居りては、實際艦隊を編成せんにも、編入すべき艦隻なく、已むを得ず、新舊取混ぜて數を充せば、全隊の脚並が揃はず、口惡き外國新聞が近時の日本艦隊を見本艦隊と冷評するも、決して嘲罵でないのである。尤も艦齡第二期及び第三期即ち豫備の艦艇は、以前に比して增加しては居るが、軍艦の豫後備は、所謂時代遲れで、攻擊力も、又速力も、格段に劣つて居るから、陸軍の豫後備兵が現役に交りて、第一線に立つ樣な眞似は、到底出來ないのである。

苟くも國家を憂ひ、國防の大切なるを感ずる人は、誠に前揭の日露戰爭當時と今日との、艦齡第一期即ち現役艦隊の隻數を對比さるべし。其の數字の懸隔を見て如何に帝國の國防が危險に頻しつゝあるかと知るに於て、思ひ半に過ぐるものあらん。實に今日は、我國防缺陷の絕頂にして、國運變轉の最大危機である。而も我が此の弱點は、掩はんとするも掩ふ能はざるもので、苟も數字を讀み年齡を數へ得る者には、內外人の別なく、分り切つた事實である。斯る危險の際に於て、圖らずも世界の大戰亂となり、其の渦中に飛入するの已むを得ざる始末となつたのであるが、幸に東洋にある敵の艦隊が微弱で、先づ當分は增勢の見込もなく、且つ來春に入れば、榛名、霧島の二大巡洋艦と曩に軍國議會に監事補充を要求されたる、十驅逐艦が竣工するから、茲に初めて幾分か此危險を脫し得る次第である。

我海軍補充の近況は大概こんなもので、尙將來に於ても其補充を急がねばならぬのであるが、斯く我國防を危險ならしめたる主なる原因は、年々

間斷なく繼續さるべき補充事業が、度々の政變(豫算不成立等の爲め中途で屢々頓挫したるのみならず、前段にも述べ置いた、常備兵の充實の原則に基ける海軍補充が海軍擴張と混同せられて、可否の議論の種となり、甚だしきは之を陸軍擴張の增師問題と對照して、偏重偏輕の比較などをされるからである。補充は補足で、擴張は增加なり、意義に於ても、又實質に於ても、明白に其分別ありて、決して混同對比さるべきものではないのである。

斯く海軍の補充は擴張にあらずと云へば、或は現に補充しつゝある艦艇は常に、其舊艦よりも勢力を增大し、隻數には變りなきも、噸數は增加して事實上の擴張になるにあらずやと反問する人もあるべけれども、夫は海軍兵力の單位と兵器の進歩とを知らざるものに、有勝ちの謬見である。聊か左に其事由を説明せんに、海軍兵力の單位は、世界何國の海軍に於ても、艦艇の隻數を基準とし、空寞たる噸數に準據するものでない。例へば軍艦八隻を以て一戰隊(卽ち一ケ戰術單位)を編成し、驅逐艦四隻を以て一驅逐隊を編成し四箇驅逐隊を合せて一水雷戰隊(卽ち一ケ戰術單位)を編成すると云ふが如きものである、去れば先帝陛下の御代に、國防兵力の標準を御治定になつたときにも、又過般の防務會議の提案等に於ても、凡て我海軍兵力の單位は、正確に隻數を基準とせられ、往々世間に誤傳されたる五十萬噸標準の如きは全然根據のなき抽象説である。斯く隻數を基準として數年に亙り常備艦隊の補充を續行する間に於て、海軍の兵器は、駸々として容赦なく長足の進

歩を爲すが故に、大なる意味に於て一種の兵器たる艦艇が、補充の度毎に漸次進化して其力量を增大するのは、時勢上已むを得ざる次第で、此の進化の爲め、基本の隻數を減少することは、艦艇編制の立前より云ふも、又列國海軍との釣合より見るも、到底出來得べからざることである。卽ち世運の發達に伴へる艦艇其物の進化を、海軍擴張と看做すのは不合理と云はねばならぬ。若し之を合理なりとせば、例へば陸軍に於て單發銃を連發銃に代へ、舊式野砲を新式の三八式に改むるとか、或は又步兵大隊に機關銃を增加し、砲兵中隊の砲數を增加するが如き、各單位內に於ける、實質の增勢は皆陸軍擴張と云はねばならぬ譯である。兎に角所謂擴張なる用語の內には、右の如き兵器の進步を含有して居らぬので、矢張り師團とか聯隊とか云ふ如き、兵力單位の增加を意味するものである。

之を要するに、海軍の補充は決して擴張の性質を含有せずして、從前より存在せる常備艦隊が、年月と共に朽廢するのを順次に補足するものである。而して之が實行は繼續費を以てすると否とを問はず、每年徐々に間斷なく、一定の速度を以て進行せしむるを、原則とし中途にて休止になり、又俄に急促したりするものでない。此れ國內の造船力量を均一且つ完全にして、工業の經濟を維持し、國貨の流出を豫防し得る所以たるのみならず、緩急定めなき世界の現勢に應じ、如何なる時機に於ても、進取退守の要求を充し得る唯一の方法である。今や天下戰國千歲一遇の機運に際會し我が帝國の海軍が其補充の停滯より、相對勢力低落の極度に陷りたること

は、我々軍人の切實に遺憾とする處である。

（大正五年十一月新聞紙上掲載）

列國海軍の趨勢に對する我海軍の現位置

後の烏が先になる――日露戰爭は兵器の新紀元――新式艦一雙に舊式艦千雙でも戰爭にならぬ――新海軍建造の發足點――列强海軍の位置に變化が劇しい――遠洋萬里渡航不可能説の迷妄――一發の拳銃彈世界の均勢を破る――國富んで國破れたる白耳義の兵備――兵備と商工業

最近過去數年間に於ける、列國の海軍が、大擴張の趨勢を以て進みつゝあることは、當國防議會の方々の夙に御承知のことゝ信じますが、自分の見る處では、之を大擴張と謂ふよりは寧ろ大改造若くは再興と云ふのが至當と思ひます、擴張と申せば今迄あるものゝ上に尙ほ勢力を增加するので

ありますが、現時の趨勢は、勢力增加ではなく、是迄あつたものを度外に無視し、勘定以外に置いて、新規に新海軍を組織せんとするのであります而して其の斯くなつた原因は、日露戰爭の結果、艦船兵器が急劇に長足の進歩を遂げ、舊來のものは總ての點に於て、著しく劣弱のものと化し去り、新式の艦艇に非ざれば、實際有事の時に役に立たなくなつたからで、斯く舊來の艦船が物の用に立たぬとすると、古き海軍の歷史を有し、絕大の海上武力を維持して居つた英國の如き大海軍國も、又漸く最近十數年間に其頭角を現はしかけた我が日本の如き小海軍國も、皆同時に新規に海軍を創造すると同樣でありますから、英國も、獨逸も、又佛國、露國、米國伊太利、日本も、海軍の勢力を維持する上に於ては、何れも同一の立場にある譯で、唯だ、比較的多額の製艦費を投じて、一日たりとも早く新式艦艇を整頓し得た國が、世界の最强海軍國となる次第であります、去れば、十年前東洋に於て殆んど全滅した露國の海軍も、亦當時の勝利者にして、多數の戰利艦を獲た日本の海軍も今日となりては、勢力に於て何等の差等は無いので、今後二三年の內には、確かに後の烏が先になるべき趨勢を示して居ります。

過去僅々十年に於て、斯くの如き海軍の大革新を惹起したる原因は、前に述べた如く、日露戰爭其物でありますが、今此戰爭以後に於て、海軍の兵器が如何に急劇に進化したるかに就き、聊か其概要を述べますれば、先づ實質上の進歩として著しきものは、

一、砲熕

日露戰爭當時海軍に於て使用したる最大砲は十二吋で、今日も尙ほ此種の砲は重用されまして、其外見だけは格別の變化を呈しませんが、其實質實力に至りては今昔二倍以上の差等があります。卽ち砲身が改良せられて裝藥の發射力が增したと同時に、彈丸其物も硬度を增して、甲鐵に對する穿通力を大にし、又砲機が改良せられて、裝塡發射の速度を增加したのみならず、照準の方法も比較的精確になつて居ります。故に同じ十二吋砲でも、今日のものは、日露戰爭當時のものゝ二倍以上の實力、否其效率を勘定すると、三倍以上の勢力と看做して差支ありません。

二、水雷

海岸防禦に用ゆる敷設水雷は假りに度外に措いて、單に攻擊用の魚形水雷に就て申しますと、日露戰爭當時の十八吋魚雷は、最大速力二十五節最大有效距離三千米突であつたものでありますが、今日の十八吋魚雷は最大速力四十五節、最大有動距離一萬二千米突に進歩しまして、或る距離に於て其命中效率は、四倍以上になつて居ります。卽ち日露戰爭の時は漸と三千米突(約一浬半)の距離に近づかなければ、魚雷を發射することが出來なかつたのであるが、今日は一萬米突(約五浬)以上の距離より發射し且つ其進行速度加增しましたから、命中率も從つて著しく多くなつた譯であります。

三、裝甲

裝甲卽ち敵彈に對し、軍艦の舷側を防禦せる鋼鐵も、練鐵技術の發達に伴ひ、日露戰爭以後に著しき進歩をなしまして、今日の六吋厚の鋼鐵は十年前の十吋厚のものと殆ど同一の抵抗力を持つて居ります。去れば一見した處では、同じ一枚の鐵板でありますが、其實質は五と三との相違がある譯である從つて同一の防禦力を持たずに、今日の軍艦の裝甲は、それだけ重量を輕減し得ることゝなります。

四、無線電信機

海軍の作戰に最も必要なる無線電信機は就中最も長足の進歩を遂げまして、日本海々戰の當時、其確實なる通信距離は四百浬位であつたのですが、それが今日は六千浬以上（十倍以上）に延長し、夜間に入りますと一萬浬以上にも到達するやうになりました、此の無線電信は軍艦の耳とも又口とも謂ふべきものが、軍艦と陸上、又は軍艦とが相離れて作戰上の命令報告等を通信するに當り、斯くまで其通信距離が異つて居つてはいざ戰爭にも相撲にもなる筈がありません。

五、運轉機關

右に述べました、砲熕、水雷、裝甲、無線電信などは、軍艦の功擊力、防禦力、通信力等の要素をなすものでありますが、偖て其運動力の要素たるべき運轉機關が、如何に發達したかと申しますると、機關の細部に亙りまして、種々の改良進歩ありて、一々茲に擧げる譯には參りませんが、其の大體に就て云へば、日露戰爭當時迄の常用汽機たりし『ピスト

ン』式機械は殆ど廢棄せられて、全然構造の變つた『タービン』式機械が採用さるゝことゝなり、又汽罐卽ち蒸汽を作る釜の構造も種々變化し、其燃料にも主として石油を利用するやうになりまして、著しく其發生馬力を高め、日露戰爭當時の戰艦の最大速力は十八節であつたのが、今日は二十二節乃至二十四節に進み、驅逐艦の如きは二十八節から三十七節になつて居ります。又十年前は未だ速力足らずして實用に適せずと認められた、潛水艇の如きも、之に用ふる『ディゼル』機關の發達した爲め、今日では水雷艇を凌駕して、殆ど完全に其戰鬪能力を發揮するやうに進化し來つたのであります。

以上列擧しました、各種兵器の進歩は、今日の十二吋砲と昔日の十二吋砲との比較、卽ち同形同狀のものを對比して、其實質上の進化を述べたのでありますが、未だ此上に形體上の進歩も亦現著なるもので、卽ち

一、砲煩は十二吋より十四吋乃至十六吋砲と膨大し。
二、水雷は十八吋徑より二十一吋徑に進み。
三、裝甲の厚さは戰艦にて九吋より十二吋乃至十四吋となり
四、無線電信の電力が一キロワットより二十五キロワット以上に飛び
五、運轉機關の馬力は、戰艦にて一萬六千馬力より四萬馬力となりました。

實質上の進歩が前に述べた如くなる上に、斯く形體上の進歩までをしたから、僅に十年を隔てた、今昔兵器の優劣は、非常に懸絶したものと

なりまして、弓が鐵砲に代つたのと同樣で、十年前の兵器を以て、今日の兵器に對抗することは到底不可能であります。

斯く急劇に進歩したる新兵器新機械を寄せ集めて、一塊に作り出した軍艦が、卽ち所謂弩級艦でありまして、方今世界軍事界の通則として、弩級艦に非ざれば軍艦に非ず、弩級艦を有せざれば海軍と認むる能はずと謂ふに至りたるは、全く此の進化より來れる結果で、日露戰爭當時迄の舊式艦艇は、今や唯だ形骸を存して、骨董同樣に看做さるゝに至つたのであります。

玆に今日の新式戰艦の標本たるべき、建造中の扶桑と、日露戰爭當時の最强戰艦の代表たるべき三笠と對照して見れば、實に左圖の通りであります。

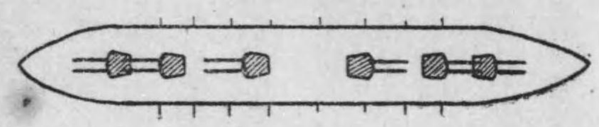
左の兩艦の圖は其原形を二十分の一に縮めたもので、其大小の比例は正確に合つて居るのであります。實質は偖て置き、唯だ此平面圖の大さだけを一見しても、舊式艦たる三笠が新式艦たる扶桑に對し。如何に劣弱たるかゞ分ります。尙ほ細かく實質に立入りて比較すれば、兵器の威力と謂ひ其數量と謂ひ、又裝甲の硬度と厚さと云ひ、機關の馬力、速力に至るまで總ての點に於て、優劣の差隔が餘り隔つて居ります。故に三笠が扶桑に對抗するは、恰も三尺の童子が横綱に向ふ樣なもので、片から相撲にはなりません。又三笠の如き舊式艦が五隻集つても十隻集つても、一隻の扶桑と對戰することは出來ません。何故なれば、扶桑は其の優れる速力を利用して、挑戰避戰己れの勝手にし、三笠の大砲や水雷の屆かざる遠距離より、其の鋭利の大砲、水雷を活用して、片ッ端から一隻づゝ擊沈するからであ

ります。尚ほ戰艦のみならず、裝甲巡洋艦の如きも、舊式のものは、之を今日の戰場に利用することは殆んど不可能であります、元來裝甲巡洋艦が戰鬪機關として、其用をなす所以は、其速力が戰艦のそれよりも優れるにありて、優勢なる敵の戰艦に遇へば、速力を早めて之れを避け、劣弱なる敵の巡洋艦、驅逐艦又は商船等と見れば追驅けて擊沈し、夫れで敵情の偵察搜索とか又は軍需運送船の破壞とか、或は通商の妨害とかの如き、輕快任務を盡すことが出來るのであります、然るに舊來の裝甲巡洋艦は最早今日の戰艦の速力に及ばぬやうになりましたから、全然巡洋艦の巡洋艦たる性能を亡失した譯で、帶にや短し襷にや長く、如何とも使ひ樣がありません。日露戰爭當時雄名を擧げたる彼の出雲とか磐手とか、又戰爭中に造り

新舊戰艦比較圖

軍艦扶桑

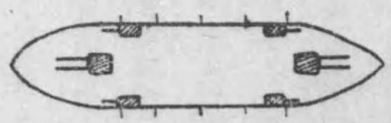
縮尺千分之一



（要目）
排水量　三〇、六〇〇噸
速力　二三節
砲　十四吋砲十二門
　　六吋砲十六門
水雷　六門
裝甲　十二吋

軍艦三笠

縮尺千分之一



（要目）
排水量　一五、二〇〇噸
速力　一八、五節
砲　十二吋砲四門
　　六吋砲十四門
水雷　四門
裝甲　九吋

初め戰後に竣工したる筑波、生駒の如き、何れも時代後れの裝甲巡洋艦で將來の海戰に於て、艦隊司令長官が其用途を見出すに苦心すべき軍艦であります。其他驅逐艦の如きも、舊式のものは肝心の速力が出ませんから、之れに乘組たる忠勇なる將士が甲板の上で地團駄踏んでも、近時の速力早き戰艦や巡洋艦に近づきて、水雷攻擊の目的を果すのは餘程困難であります又日露戰爭當時には隨分働いた彼の水雷艇も、今日では新進の潛水艇に全く其株を讓つて仕舞ひまして、此の十年の間一隻も新に建造されたものなく、今後數年にして、悉く廢棄せられ、同時に水雷艇の名稱も消滅し、或は潛水艇が水雷艇と呼稱さるゝやうになるかと思ひます。

先づ初頭に述べました、列國海軍の改造、卽ち新海軍再興の已むを得ざるに至らしめた原因と經路とは、大略前段の如きものであります。此の海軍改造に就ては、無論少からざる費用を要する次第で、去ればとて、國防上無くてはならぬ海軍でありますから、各國共に其慘憺たる經路に苦心しつゝ戰雲の遠ざかれる平和の間に、一日も早く之を完結せんと競爭努力しつゝあるのであります。而して其經營の苦痛は獨り我國ばかりではなく、英國又は獨逸の如き、在來の世帶の大きいものは、それ相應に新世帶も大きくせねばならぬから、從來の海軍力の大なるものだけそれ丈け其苦痛も大きい譯で、之れが爲め、近年英、獨、佛、米、露等の列國は毎年一億乃至二億萬圓の製艦費を投費して居ります。それに就き、露國の海軍大臣が曾て斯ういふことを公言して居ります。『我露國の海軍は日本と戰ひて全滅

したれども、今日海軍を再興するに當り、何等過去の歴史の影響を蒙むことなし、何となれば舊來の海軍は有るも無きも同樣にて、新海軍を建造する發足點は、英國も獨逸も我露國も同一なれば、唯之を完成すべき八年間の奮勵努力如何にあるのみ、見よ八年の後には獨逸の海軍を我脚下に踏み破るの時節到來すべし』と此一言は卽ち近時露國海軍大擴張の精神とも謂ふべきもので、確かに充分の眞理を含んで居ります。此の如き再興海軍國に對し、舊來の大海軍國たる英國又は獨逸等が其優勢を維持するには、更に一層の努力を要する次第で、其の苦心慘憺の結果、終に軍備制服協約等の提案さるゝに至つたのも偶然でないと信じます。

前述の列國海軍改造の趨勢に對し、我國の海軍が之に伴うて如何に其歩武を進めつゝあるかと云ふに、財政の狀況其の他の關係より、遺憾ながら列國に追從して從來保有し得たる地位を支持する能はざるのみならず、年々低落して退歩しつゝあるのであります。其の低落退歩の程度は、正しく彼我投費するの製艦費額の大小に正比例すべきもので、他外國が年々一億乃至二億萬圓を費すに對し、我國は四千萬圓內外を以て之に追從し、而も其四千萬圓の支出すら度々の政變豫算不成立等の爲めに停滯するのであるから、低落退歩せざらんとするも得べからざる次第であります。去れば我海軍は他列國の如く改造とか擴張とかの如き、大袈裟な眞似は無論出來ないので、唯だ僅かに舊來の艦艇が老朽廢滅するのを補充し、其の補充艦艇に新式の改良を施して世運の進歩に伴はんと努めつゝある丈けでありま

す。此の補充のことに就て、玆に簡單に御話すると、軍艦も人間と等しく壽命があつて、何時迄も存續するものでないから、其艦齡を限りて、一定の使用年限を終りたるものは廢艦とし、新に新艦を造つて、之を補足する主意のものであります。我海軍にては此艦齡が二十五年と定めてあつて、之を三期に分ち、第一期八年、第二期八年、第三期九年としてあります、而して此の第一期の軍艦が八年の役務を了つて第二期に入ると、新艦が生れ出て、少くも第一期の軍艦丈けは從來在つた丈けの隻數を充たして置くといふ方法で。宛も陸軍が現役、豫備役、後備役の三兵役期に區分せられ毎年新兵を補充して現役兵を充實するのと同一の立前であります。然しながら、近年の如く海軍技術が急劇に進歩しては、此の補充も誠に姑息な手段で、艦齡第一期即ち竣成後八年未滿の軍艦中には、已に艦齡七歲有餘の若年寄りもあれば、又今年生れ出たばかりの艦齡一年のものもありまして同じく第一期艦船ではあるが、其實力に少からざる徑庭があります。例へば我海軍現在の第一期巡洋戰艦の生駒(艦齡七年)と金剛艦齡一年とを比較しますと其の年齡に反比例するだけの實力の大差があります。斯くの如き實力の違ひがある軍艦が集まりて第一艦隊を組織したとて、肝腎の足並が揃はないから、到底安全な戰術的運動は出來ない譯であります。故に完全な國防海軍を組織するには矢張り斷乎たる改造手段に據るの外ないのでありますが、前申した通り、我國今日の財政狀況では、到底左樣のことは不可能で、姑息たりとも補充方針を取るの外途なく、而も其補充すら未だ完

結せざる現下の實狀であります。尙ほ此の補充の近況に就こは、別に述べようと思ひます。唯だ、茲に吳々も各位の御記憶を望むのは、一たび建制せられたる海軍も、其の補充を爲さゞれば、二十五年の後には全部自然に消滅するといふことゝ今年の海軍は昨年に比し艦形隻數には變りなきも、實力に於て二十五分の一の減耗があるといふことであります。

却說、前述の如き慘憺たる經營の下に、今回皆新式海軍の整頓を競うて居るのでありますが、其結果、現時に於ける列國海軍實力上の地位は著しく變化し來り、又將來に於ても變化せんとするの傾向を示す樣になりました。其實力との地位の高下は無論新式艦艇のみの優劣の對比に據り、舊式の艦艇は勘定以外に置かねばなりません。而して英國とか獨逸の如き大海軍國は、其實力が餘りに高過ぎますから、比較するまでのことなしとし我日本を基準として、將來の國防關係上其の相手ともなり得べき、米國と露國との海軍實力を比較すれば、先づ左表の通りであります。

日米露海軍力比較表（新式艦艇）

艦種	國別	大正三年	四年	五年	六年	七年	記事
新戰巡洋戰艦	日	六（薩摩安藝ヲ含ム）	九	九	九	一〇	此新式二艦種ハ將來ノ海戰ニ於テ第一線ニ立ツヘキモノニテ勝敗ハ主トシテ其ノ優劣ニ依リテ定マルモノナリ
	米	一〇	一二	一三	一六	一九	
	露	六	九	九	一二	一四	薩摩、安藝ハ最早舊式ニ近シ
新輕巡洋艦	日	三	三	三	三	三	輕巡洋艦ハ海戰ノ補助タルニ過ギスト雖モ其ノ高速力ヲ以テ偵察搜索等ニ從事スルノ必要アリ我日本ノ輕巡洋艦中之ニ適合スルハ平戸筑摩、矢矧ノ三艦ノミナリ
	米	三	三	三	六	九	
	露	一二	八	一〇	一〇	一四	
新驅逐艦	日	四	一六	一六	二四	二四	驅逐艦ハ夜戰ニ缺ク可ラサル艦種ニシテ新式驅逐艦ハ其ノ速力及航

潜水艇	米	三五	四〇	四六	五二	五八	力大ナルヲ以テ輕巡洋艦ノ用ヲモ辨ズ舊式驅逐艦ハ今ヤ其速力減退シテ舊式巡洋艦ニ劣レルヲ以テ充分ノ使用ニ適セズ
	露	一〇	二七	四九	五八	六七	
	日	一三	一五	一五	一五	一七	新式潜水艇ハ其ノ速力及航續力共ニ增進シタルヲ以テ將來ノ海戰ニ於テ小型驅逐艦ヨリモ效用大ナリ
	米	三八	四二	五〇	六八	七六	
	露	二九	三六	五一	五七	六三	

（備考）本表ニハ米國ノ新大擴張案ヲ合マス

舊式艦艇は今日の實力比較に算入する能はざるも參考として左に掲ぐ

日米露海軍力比較表（舊式艦艇）

國種	國別	日	米	露
舊式戰艦		六	一五（此大部分ハ比較的艦齢若シ）	五
舊式一等巡洋艦		一三	一三	三
舊式軸巡洋艦		四二（大正十年ニ度至リ六隻ニ減少ス）	一四	五
舊式驅逐艦		八	二〇	九四（此大部分ハ比較的艦齢若シ）

此表にある如く、大正三年の比較は、先づ戰艦及巡洋艦に於て日本と露國とは已に同等均勢となり、又日本と米國は六と十なるも、年を重ぬるに從ひ、日本は漸次低落して、大正七年には我十隻に對する米國の十九隻、露國の十四隻となります。我國が攻擊を取らざる限り、我の二に對する彼の三迄は、充分戰うて國防の任務を果し得る心算でありますが、此の比例を越えて、我が一に對する彼の二に近づきては到底大丈夫と御請合は出來ません。之は單に海軍の主力たるべき戰艦と巡洋戰艦とに就ての比較でありますが、我々が此上に尙ほ一層苦痛とせる處は、奇襲の武器たる驅逐艦

潜水艇等の不足でありまして、米國に對しても亦露國に對しても、其隻數が格段に懸絶して居ること、前表の數字が示す通りであります、我が國力の現狀より推しまして、我海軍が米國又は露國よりも、多くの戰艦を保存することは、近き將來には到底望むべからざることで、已に主力たる戰艦の隻數が定まらずとすれば、正々堂々の對抗は無論六ヶ敷いから、已むを得ず先づ守勢作戰を取るの外ありません。其守勢作戰に最も必要なるは驅逐艦、潜水艇の如き奇襲の武器にて、之れが斯くまで不足し居ては、守勢作戰すら充分に行ふことは出來ません。去れば此驅逐艦潜水艇固より、之等の小艇を掩護して其效用を發揮せしむべき快速の輕巡洋艦等も、矢張り彼の三に對する我の二に比例以上に整備させたいものであります。自分は

茲に責任を以て告白して置きますが、我海軍々人の精神と腕前は確かに世界何れの海軍にも勝つて居りますから、飛車、角行位は何時でも卸してやります。然し、桂馬と歩兵の立場にある、驅逐艦と潜水艇に之を掩護しつつ敵陣の亂るゝに乘じて進擊し得べき金將銀將位は揃うて居りませんと、一寸手の出し樣がありません。

斯く申しますと、或は、米國と云ひ、露西亞と言ひ又獨逸と言ひ、我國の對手ともなるべき國は、皆遠洋萬里の外にありて、有事のとき其艦隊を東洋に派遣するに當り、迚も精鋭の全力を擧げて來る譯には行くまい、との御質議があるだらうと思ひます。處がそれは大變な見當違ひで、若しそんな算を立てたら、必ず不覺を取ることゝ信じます。本來海軍なるものは

陸軍と違ひ、浮動的に出來たもので、船其物が家ともなり、倉庫ともなり病室ともなり、學校ともなり、又砲臺ともなる樣になつて居り、戰場で戰ふにも、走り乍ら大砲水雷を發射するのでありますから、命令一たび下れば、早きものは六時間、遲きものも一週間の內に戰備を整へて出動し得るのであります。而して海洋は世界共通の公道で、縱橫無盡に交通の自由を得まして、陸上に於けるが如く、僅かに一二條の鐵道とか他國の領土とか云ふが如き、行軍上の制限や障害は少しもないのであります。故に燃料供給の方法さへ立てゝあれば、此の小さな地球の二週や三週は何でもないことで、それがため給炭船、給油船、給水船、給糧船、工作船、病院船等の如き軍用機關が設けられてあるのであります。之れさへ準備してあれば、世界の海洋何れの處に往くも、立派に移動的根據地を開き少しも不自由はない譯で、艦底の修理に要する船渠と雖も、浮船渠を曳き來れば、何處でも造船所を開くことが出來ます。卽ち之等の軍用機關の集泊せる處は、取りも直さず、立派な軍港となる次第で、我國の伊勢灣や鹿兒島灣は瞬く間に敵の軍港となるかも知れません。又潛水艇の如きも大型のものは單獨にて太洋を渡り、其小型のものも、四隻又は六隻宛位を船腹に包容して航海し得る、潛水艇運搬船卽ち所謂『ガンガロー』船の設けがありまして＝我海軍にはまだ此んな充分な設備はありませんが＝宛たかも『ガンガロー』が數匹の兒を腹に入れて飛び歩く樣に、太洋を渡航して、敵國軍港の附近に現はれ、直に潛水艇を卸しますから、開戰後二週間立たぬ內に、敵の潛

水艇が東京灣に潜入して品川沖に現はるゝやうなことは、確かにあり得べきことであります。（備考浦鹽、馬尼剌等には多數の潜水艇あり）去れば他に國際上の牽制なき限り、或る海軍國の全艦隊が東洋に現はれ來ることは出來得るのみならず、有り得べきことであります。現に露國のバルチック艦隊は、十年前ですら、其全力を擧げて東洋に渡航し來たではありませんか、之れが途中で掩留したのは、航海の困難のためではなく、主として戰略上のためでありました。又之れが日本海に敗れたのは、必ずしも遠航に疲れたためではなく、戰術砲術等に於て劣つてゐたのと、我が多數の驅逐艦水雷艇の果敢なる襲擊に耐へなかつたからであります。又近き例を引けば、數年前米國の新鋭戰艦十六隻は、自己の補給機關を伴ひて、世界を一週し、炭水、糧食等に就き少しも他國の供給を受けずに、此の航海を遂行して居ります。當時此艦隊が横濱に來だ時に、之れに炭水、糧食等を賣込み、一ト儲けしようと待ち構へて居た商人が、少しも買つてくれんので、大分損をしたさうであります。米國艦隊の巡航は主として戰時補給の實驗を目的としたもので、此の實驗の成績に鑑み、更に其設備に大改良を加へ今日は他外國には見ざる程の潤澤な準備をして居ります。兎に角、交通機の發達するに從ひ、世界は年々小さくなりつゝありまして、太平洋位の關往來は最早今日左程の困難もありません。現に今度の戰爭が我國の艦隊の一部は南北太平洋に亙り、南米の沿岸迄も出掛けて作動して居ります。

上來述べ來りました如くに、列國海軍の趨勢に對する、我海軍の現地位

は、決して優秀でもなく、又向上しつゝもありません、否な劣弱にして低落しつゝもあるのであります。然し我々海軍々人は決して之れで戰が出來ぬとか、又是非新鋭の艦艇を增してくれとも申しません。海軍を補充するとか又擴張するとかは國家の爲すべきことで、軍人の業務ではありません。我々は國家より與へられたる武器を以て極力其の本分を盡し、斃れて後已む許りで、竹槍でも棒切れでも又肉彈を以てしても、最後迄奮鬪することを期して居ります。去りながら、又一國民として、世界に對する我國の立場を辨へ、生存競爭の世態に於ける優勝劣敗の現象を目の當りに實見するときは、我海軍に此弱點が、帝國將來の國防は勿論、外交、經濟等にも少からざる惡影響を及ぼさゞるを憂へざるを得ないのであります、國際の戰爭は何んな時起るか豫測し難きもので、外交や國論で避け得らるべきものではなく、現に墺國の皇太子を繫つた拳銃一發が導火となつて、此世界的大戰亂を惹起して居るではありませんか、大正三年の七月中に世界中誰か八月以後の大亂を豫想し得たでせうか、我々は年來已にこの海軍の不具なるを自覺し、今若し何か事が起つたならば、軍艦は新舊チグ、ハグにて艦隊を組織するにも都合惡しく、如何にして國防の要求に應ぜんかと苦心焦慮せる最中に、時運は人を待たずして、十年目の日獨戰爭に飛び込むの已むを得ざるとなりました。斯く戰爭となりたる上は、何はともあれ、第一に不足せる驅逐艦を補足せんとて、我海軍の當局が驅逐艦十隻の急造を軍國議會に要求されましたに對し、世間では往々火事場泥棒の如く評し

た人士も有つたさうです。斯樣なことを云ふ人士には固より國事を談じ國政を語る資格は無く、又斯樣な人に憂國の誠心がありとは思へません。

偖て此の戰爭の將來が如何に成り行くべきか、好し戰爭が聯合國側の勝利に歸し平和を克復し得るに至つたとしても、戰後の形勢殊に我國の立場は、政治上又軍事上に於て、決して是迄の如き樂天的のものではなからうと豫想致します。その時に當り、彼處に一たび樹てたる旭日の國旗は故なくして之を下さず、此處に一たび下したる此の手は理由なくして之を放さず、と頑張り得る意氣地の根據が何處にありませうか。又隣邦支那に領土保全と云ひ、機會均等の下にその利權の獲得擁護、或はその內治の改善、外政の指導と云ひ、いづれも我日本その物の存立に至大の關係を有する國是の要件にて、決して他人の他事ではないのでありますが、口先ばかりでなく、實際に之れを主張し、之れを貫徹すべき度胸が何處から出て來るでせうか。將た又年度六十萬以上の增殖をなしつゝある我民族が、內地丈けにその生存の途を得るの不可能なるは、數の當然で、すでに同胞相喰むの徵候さへ見えて居るのでありますが。之を救濟するには、海外移民の勵行に待つの外なく、此の海外發展に對する、排日の抵抗を緩和し制壓し得るものは、結局何でありませうか。すべて此の如き我が國刻下の存立生存に必須なる諸用件の解決は勿論、我帝國皇謨の一大天職を萬世に亙りて遂行するには、少くもその三分の一は威力の作用に待たざるべからざること明白にて、若し果して然りとせば、先づ第一にその衝に立つべき我海軍の現狀

に就き、吾人は決して滿足することは出來ないのであります。

およそ、一家安全天下泰平の要訣が、富國强兵主義であるは申すまでもないことでありますが、國富まざれば兵も强くすること出來ず、また兵强からざれば國を富ますことも出來ないので、富强は相續いて併進せねばならぬものであります。若し一方に偏して、富國弱兵と貧國强兵と孰れが現今の時勢に適するかと云へば、彼の白耳義の如き富國弱兵主義が、實以て危險千萬なること同國刻下の慘狀を見ても自覺致されます。我日本は如何に自尊しても、他國に比して未だ富國とは申されませんが去りながら、矢張り富强併進の原則丈は履んで、英國獨逸等の如き富國が其軍備に費やす丈けの比例に從ひ貧なれば貧なる丈けに、夫れが相當の軍費を支出すべきであります。今本年度に於ける、歐米列强の總歲出額に對する軍費支出の比例を調査して見ますと、大體は左表の通りであります。此表になる各國軍費の細目は國々に依り、種々異つて居りますのみならず、英國米國の如き民業の發達した處と、露國の如き官業萬能の國とがあるから、無論精確の比較にはなりませんが、先づ大體に於て、各列國が年々支出する軍費は其總歲出額の三分の一以上で、獨逸の如きは實に二分の一弱を支出して其軍國主義を實行して居ります。故に我國も此の比例丈けには軍費を支出するの覺悟を要し、總歲出を六億圓とすれば、二億萬圓以上は出さなければなりません。又貧國强兵主義が當分必要なりとすれば、獨逸に倣うて二億五千萬圓を出しても宜しいのであります。大本の總歲出が格段に少い上に

大正三年度列國の總歳出と海陸軍費の百分比

國名	總歳出額	海軍費	陸軍費	總歳出ニ對スル海軍費百分比	總歳出ニ對スル陸軍費百分費	總歳出ニ對スル軍費百分比
英國	2.054.672.165円	476.525.195円	281.613.735円	23.2%	13.7%	36.9%
米國	1.608.267.692円	295.205.609円	409.656.563円	18.4%	25.5%	43.8%
佛國	1.969.443.000円	248.988.291円	551.475.000円	12.6%	28.9%	40.6%
獨國	1.670.951.135円	228.944.584円	581.548.584円	13.7%	34.0%	48.5%
露國	3.672.125.867円	258.410.261円	747.741.493円	7.0%	20.3%	27.4%
日本	559·759.598円	91.671.623円	86.140.829円	16.4%	15.4%	31.8%

（備考）　佛國ハ豫算外支出ニ艦艇建造費約一千五百萬圓アリ上記ニ算入シアラス

露國ハ宜業萬能主義ナルヲ以テ歳出ニ對スル軍費ノ百分比ハ低率ナリ

其軍費支出の比例迄を低くしては、一等國は愚か二等國としても立つべき威力が添はないかと思ひます。

斯く軍費支出に對する國家としての腹が定まつたならば、其二億なり二億五千なりを、四圍の情勢に應じて海陸軍に分配すれば宜しいので、自分の考へにては、當分此の範圍内の軍費を以て我國の國防軍備は充分出來ることゝ確信して居ります。

終りに臨んで、一言を添へまするが、國家が其軍備の爲めに多額の軍費を投ずることは、其の國の工業力量を越へざる限り、決して國家經濟を攪亂するものでなく、或る意味に於ては、却つて經濟上の調和を圖り得るものと信じます。殊に海軍の軍費は主として艦船の建造に投ずるのであり

まして、其資金は造船兵造機は勿論製鐵、製鋼、電氣等の如き、各種工業の經濟を助け、之れに從事する數百萬の職工々夫を霑して金融を圓滑なしむるのみならず地下に埋沒せる天有の鑛物石炭等を人有に移して、地上の富を增加せしむるものであります。故に英國の如きは國防の目的外に、工業經濟のため、毎年幾隻かの軍艦を新造するの必要を認めて居ります。兎に角國家が歳入として國民より或る資金を吸上げ、又之を歳出して吐き降らすことは、所謂經濟資金の上下動にて、民間に於ける其の水平動と相似て全般の金融を助成するものと聞き及んで居ります。資金は動て初めて其用を爲し、金が金を生出すやうになるので、恰で天日が地水を蒸發し、又雨露となして之を降らすの上下動をなし、又河川が地水を分配して水の水平動を掌り、斯く動く間に水車も廻り米穀も實ると同樣かと信じます。其れ專門の方々の居らるゝ處に、軍人が經濟上の御話しをするのは僭越至極でありますが、列國海軍の趨勢に對する我海軍の現狀如何を述べるに附け、勢ひ終に此處まで申上げた次第であります。

（大正三年十一月國防議會講演）

米價と國防の關係　附燻炭肥料普及の必要

米價の波及する範圍――米價の調攝は國防の根本也――米作と燻炭肥料――予の實驗より燻炭肥料使用を勸む

米は我日本人の常食料で何は兎もあれ、之れが充足して居らぬと、一朝有事に際し、海外との交通が杜絶したとき、如何に海陸軍が外に働いても國民が內に飢餓するやうでは、國防の目的が達せらるゝものでない。又米價は我國諸物價の基準となり、一般國民の生計を支配するものであるから

之れが高過ると、直接には各種軍事經營の豫算に影響して、國防機關の力量を減少するのみならず、間接には一般風敎の維持を困難ならしめ、延て軍隊の實力迄を劣下せしむるもので、我々に取つては、右の直接影響よりも、寧ろ間接の影響が最も恐ろしいのである。

回顧すれば明治三十一年より同四十三年迄十餘年間の米價は、概して十一圓若くは十二圓臺であつたものである。此の如き比較的高低少き一定の米價が、明治四十四年に至り、遽に十七圓に騰貴し、爾來年々昂騰を續け近年に至り更に逆騰して、二十圓は愚か甚しきは三十圓近くといふ驚くべき高値を唱ふるに至つたのは、餘り急遽な變化と謂はねばならぬ。然も他方面に於ける國勢の進歩が之に伴はないから、一定の收入に衣食せる官吏、役員、職人、勞働者などが、此三四年來遽に生活上の大苦痛を感ずるに至つたのは、當然の結果である。さりとて、急に三度の食事を二食に減ずる譯にも行かず、衣食の不足に窮迫せられて、禮節も廉恥も忘却するの惡傾向を呈し、詐欺となり、窃盗となり、收賄となり、賣淫となり、墮落となつて、社會の凡ゆる方面に害毒を及ぼし、見えを張らぬと喰へぬから此んな窮した時に限り、却て世は逆さまに華美傲奢の惡風を生じ、護國の軍隊に迄其惡影響を及ぼすやうになつたのも、一は又此米價の暴騰に原因して居るのである。自分の親友たる某統計家の立算に據ると、此二三年間の米價幷に諸物價の平均價額を標準として、一人前一年少くも三十五圓一錢五厘の食費が無ければ、人間一人が何うしても生きてることは出來ぬ。

而して我日本の一家族は統計上平均一戸五人、三の割合であるから、一戸一年の所要食費は凡そ百八十五圓餘である。所が一年に一家百八十五圓で濟ます樣な下層勞働者一人の年收は、統計上平均百三十圓位であるから、一家二人以上勞働に從事するものがなければ、一家五人、三の內誰れかゞ餓死せねばならぬ勘定となる。但し之は唯だ食ふ丈けの勘定で、また其外に屋賃も出し、着物も着、又病氣になれば、藥も飲まなければならぬのであるから、夫婦に子供の三四人も持ち、年取つた親でもある下層の一家族では、夫婦が一生懸命に共稼ぎしても、子供を學校に遣るどころか、最愛の娘を賣らねばならぬやうな始末となるのである。

之を以て見ると、近年に於ける二十圓以上の米價は、決して我國今日の生活程度に適し得たものではなく、どうしても米價はまだ十五圓臺位に止め置くの必要があるので、國防の根本も亦此處等から割出さねばならぬのである。所が昨今人爲の原因が自然の結果かは知らないが、兎に角其十五圓臺に米價が低落し來つたことは、先づ何よりも有難い現象で、何うか此位で三四年を持續せしめたいものである。さすれば、中流以下の生活難も次第に減少し、各種の營業も圓滿に發達し、又衣食足つて禮節を知る者が多くなつて、風敎敗頽の嘆きも少くなるのであらう。去りながら、米價の昂騰は、需要供給の關係より生ずる自然の趨勢で、何時までも之を低位に保續することは到底不可能である。我國は貧乏子澤山の諺に洩れず、此五六年間年々平均六十萬の人口の增加で、斯く子寶は增殖しても、帝國の

田地が殖える譯ではないから、內地に於ける食料品の供給は次第々々に足らなくなつて來るのである。現に米。麥、豆、砂糖、鹽の如き、無〳〵ならぬ食料品が、內地の生產では著しき不足を告げ、之を外國に仰ぎ、就中米の如きは年々三百萬石以上を輸入して居る。之等の不足は、商業や工業の利益で補ひ得たとしても、人口の增加に對し食料品供給の不足が、米價を騰貴せしむることは已むを得ない結果で、已に明治四十一年頃より其兆候は見えて居つたのである。幸に四十二年の大豐作及び四十三年の朝鮮併合等で、一時の凌ぎは付いたが、遂に大勢には抗し難く、四十四年頃より急激なる米價昂騰の事實が現はれて來たので、今日幸に十五圓臺に下落したとて、それが何時迄も永續するものと安心して居る譯には行かぬのである。固より內地食料の不足は、外國貿易や海外出稼の利潤で補足すれば、國家經濟は立つものであるが、其貿易も近來は年々の輸入超過で又海外移民の送金も知れたものである。若し夫れが英國のやうに、國家保險の大海軍がありて、終始海上貿易を確實に維持し得らるゝものなれば、食料は凡て外に仰ひでも差支ないが、我國は未だ中々そうは行かない。何んとかして、內地に於て食料特に米穀の供給を增加し、米價を昂騰せしめないやうな方法を講ずるの外、今日の處他に國防の根本を鞏固にする途はないのである。

明治初年よりの米作統計表を見ると、我國の米作は年々平均幾分か宛增進しては居るが、近年の如く年々五千萬圓以上の外國肥料を輸入し、所謂

金肥を使うて增收し得たのでは、肥料の値段丈けの外國米を輸入したのと同樣である。是に於て、自分は近來漸く世人に知られて來た、日本製燻炭肥料の普及の必要を切實に感ずるのである。此の燻炭肥料は、藁又は萱などの如きものを燻燒して、之に淡き人糞肥料を吸收せしめたもので、其心得さへあれば、誰にでも容易く手製し得る一種の人造肥料である。其效用の原理は、化學的よりは寧ろ物理的に屬し、燻炭が克く肥料を含蓄するため其の水中に流失し又は空中に放散するを防ぎ、肥養分を亡失せしめないこと、（自分は夏日田野を散步し、肥料の臭氣鼻を衝くを感ずる每に、無智の農民が徒に肥料の要分を空中に放棄し、莫大なる損失をなしつゝあるを惜まざることなし、又一つは燻炭其物が不淨水分の媒介に依り、地方に存在する幾多の礦物要素に對して電氣作用を起し、爲に地熱を高めるからである。換言すれば、燻炭其物が肥料たるにあらずして、之れあるがため少量の人糞肥料が正味有效に作用すると同時に、炭素と礦物の電導熱に依り、植物の發育を助長するのである。自分は此の六年間自家及び同好者の實驗成績を見て、其效能の細實顯著なるを信じて疑はざるのみならず、國家の爲めと思つて、其唱導者たる故小柳津翁及池田謙藏翁等を助けて、職掌以來に其普及に力め來つた一人である。

然るに、此の奇特なる肥料の普及が、兎角農學者間の異論と、輸入肥料業者との反對に妨げられつゝあるは、實に痛嘆に耐えざる次第で、其學說上の異論も此數年の實績に依り、最早大抵打消され、今日は唯だ貴重なる

葉を燒費するから、農事經濟の趣旨に違ふと批難される位であるが、燻炭は葉に限らず、落葉でも刈萱でも亦塵芥でも、皆燻燒して造り得るもので現に年々數萬圓を投費して、掃除又は燒棄てつゝある東京市内の塵芥からでも、莫大な肥料を燒き出すことが出來るのである。卽ち取りも直さず廢物利用、天理循環の妙法に適合せる最も經濟的な肥料で、若し假りに其原料が不足するとすれば、輸入肥料のため年々國外に流出する五千萬圓の小部分を以て、外國から藁を輸入しても收支償ふのである。

議論は偖て置き、此の燻炭肥料の效用は、已に着實なる各地方の農業者に認められ、甲より乙、乙より丙と傳はり傳はつて普及しつゝあるから、特に奬勵せずとも、今後十數年も經てば全國の農家に使用せられ、國利民福を增進するに至ること、疑を容れないけれども、其の普及が一年遲れば、卽ち國家一年の損失、二年送るれば二年丈けの損失となる次第で、實際の成績に徵すれば、此肥料を施して得らるべき米麥等の增收は、從來の作法に比し、少くも一〇〇倍半以上（多きは三倍以上のものあり）であるから、普及の遲速に依り、年々得失の差隔は莫大なものである。尙ほ此肥料は單に米麥のみならず、蔬菜にも、果樹にも、又盆栽等にも凡て適用されるので、自分は之を庭前の栁に施して多大の美果を得たことがある。

以上は單に燻炭肥料の梗概を述べたばかりで、前に米價の低落を喜ぶと同時に、又其將來を憂へて玆に說き及んだのである。自分が海上の軍人として、職掌以外に、斯く米價とか肥料とかを談論するのは衷心より好まぬ

處であるが、前に述べたやうに、之れが世道人心に間接の惡影響を及ぼし軍隊の元氣も爲に敗頽するの虞れあるのみならず、國防の大計畫を實施するに當りても、我國の富力が常に吾人の要求を充たすに足るを感じ、富國强兵の根本義に溯つて、終りに此の如きこと迄を心配せねばならぬやうになつたのである。（大正三年四月）

支那と對比して日本國民性の自覺

天の命是性、性に率ふ是道――性格の相違と智、情、意の發動の相異――支那人の性格――支那人には情死がない――個人的現在主義――支那人の箇性を作れる源因――日本の閥族心を善用せよ

同じ東亞に於ける同文同種の民族で、且つ千有餘年の間、絶えず相接觸交通し來つた我が日本人と隣邦支那人とではあるが、各其の國體及歴史上の感化や、又山海風土の影響で、此の兩國人の間には、著しき正反對の性格上の相違がある。――此の性格とは『天命之れを性と謂ひ、性に率ふ

之れを道と謂ふ』の性格で、或は心性と云ふ方が適切であるかも知れぬ。予は前後數回支那の南北に旅行し、事に遭ひ物に觸れて、常に此の性格の相違を感じたのであるが、此の相違が分らなければ、支那の事物の觀察も判斷も出來ないのみならず、我が日本の特性たる大和魂が如何なるものであるかも自覺されないのである。多くの人は己が潔白であると、人も潔白だと信じ、自分の喜ぶことは、人も喜ぶであらうと思ふが、夫れは大間違で、性格が違へば、喜怒哀樂悉く違つてくるものである。我が神國には古來一種異樣の氣風が存續して居て、多年相接觸せる隣邦の支那人ですら、此の性格の表現に就ては全く正反對である。況んや歐米人等には之れに似寄つた特性が見受けられないのである。而して『性に率ふ之れを道と謂ふ』が如く、其の國の倫理道德は、此の國民性から出て來るのであるから、西洋倫理の原則等を以て、我が國の道義を解釋しやうなどゝすると、飛んでもない大間違が起るのである。

偖て、予が支那國民の性格の著しき相違に氣の附いたのは、別に深い研究とか詳しき考證などからではない。至極卑近な點から觀察し得たのである。先づ支那の一海港に着船して、上陸しようと思ふと、無數の舢板（通船）が我れ勝ちに客を載せんとして、先を爭ひ、喧々囂々、相罵り相排して、群り來る有樣は、宛ら一場の大喧嘩でも始まつたかの如く思はれる。又汽車旅行をして、支那の或る停車場に降りて、人力車に乘らんとする時、無數の車夫が客の面前に梶棒を突き出して來る有樣も、矢張り水上の舢板

と同現象である。其の時我々日本人は直ぐに感じる。若し其の内の一舟又は一車に乗らうものなら、それこそ本當の大喧嘩となつて、車から引きずり下されはせぬかと、危惧の思ひをするのである。ところが、又不思議に夫れが正反對で、手當り次第何の車にでも舳板にでも、飛び乗つて見ると、意外十萬、今迄囂々たりし喧噪は頓に治まつて、銘々元の持場に歸り、何處に風が吹いたかと云ふやうな顔付で、静粛に澄して居る。若し之れが日本の内地なれば、大抵前以て競爭を避くる爲めに、客を乗せる順番が定めてあつて、横から出て客を奪ふやうなことをすれば、直ぐに鐵拳が飛んで梶棒が折れ、御客は立往生せねばならぬのである。之れを以て見ると、支那人は同業仲間にも結合心が乏しくて、銘々各個本位であると云ふことが分ると同時に、又至極諦めが善くて、過去の事に執着せず、一度事定まれば、客を取られた商賣仇に對して、左程執念を殘さないことが察せらる。

先づ、斯んな點から氣を附けて見て、尚ほ人情風俗の細事に迄着眼すると、日本の新聞の第三面に、毎日の樣に出て居る情死事件は、支那では今も昔も殆んど皆無で、想夫憐と云ふ言葉はあるが、其の事實は少しも見當らない。抑も此の情死と云ふものが、心理上何うして起るかと云へば、離る可らざる男女の粘着性に、過去の情義と未來の絶望とが附き纏つて成立するものであるが、此の情死の無いところを見ると、支那人は青春燃ゆるが如き男女の間にも、日本人程に一身同體的の粘着性が無くして、矢張り各個本位らしく、唯現在を主義とし過去にも未來にも執着せぬものと見え、

る。同じ人情の發作より現出する仇討事件なども、亦支那の古今を通じて殆んど稀有である（晋の豫讓の如きは例外中例外であ）。支那人は君父の仇は俱に天を戴かずなどゝ口では云ふが、心では左程切實に思はないので、日本人は君父の恩愛が身に沁みて、明けても暮れても忘れられないからこそ艱難辛苦を嘗め、命を投げ出して迄も仇討をするのである。日本人には死んでも忘れぬ程に執念深いものが多いが、支那人は生きて居て忘れる程諦めの善きものが多い。此の諦めの善いことに就て、上海の某日本醫師から聞いた實話がある。蘇州附近の或る中流以上の支那の豪家で、子供が急病と云ふので呼びに來たから、行つて見ると、其の家の門前に二歳許りの嬰兒が蓆の上に捨てゝあつて、大變に泣いてゐるから、聞いて見ると、之れが卽ち其の家の病兒で、已に昨日支那の醫者に見て貰ふたら、最早到底助からないと診斷されたから、易簀の爲め、門外に移したとのことである。（易簀とは支那古來の風習で瀕死の病人の床室を易へることなり）。其の病兒は腦膜炎で、到底助からなかつたさうではあるが、斯んなことは到底日本人の想像の及ばないところで、善く言へば諦めの善いのであるが、惡く言へば誠に親子の情愛の薄いものである。若し之れが日本の母親ならば、嬰兒が死んでも、未だ其の遺骸を抱いて泣いて居るべきところである。予は斯く彼我性格の相違を觀察し、初めて氷解し得たのは、刑場に於ける支那人が誰でも彼れでも、何故に神色自若として從容死に就くかの一大疑點であつた。單に自己一人の本位として、他に執着することなく、過去の追

想と未來の望念がなければ、死に瀕して從容自若たるべき筈である。日本人の死際の比較的見惡いのは、我が志望は誰が繼ぐであらうか、我が無き跡で妻子は如何にするであらうか等の執念があるからで、此に日本人の日本人たるところがあるのである。之れを君臣、父子の間に見ても、或は夫婦、兄弟、師弟、朋友の中に見ても、其の間に於ける情義的執着心は、日本人と支那人の間に宵壤の差隔があると思はれる。支那の古の聖賢が一生掛つて道を說き敎を布いたのも、支那人個々の粘着性を增さんが爲めである。之れに反して我が日本には、輸入されたものゝ外に、別段事々しく書いた敎もないが、却つて其の粘着性の存續して居るのが不思議である。仁義とか忠孝とか云ふ文字は、日本人の特性を言ひ現はす爲めに、支那人が作つて呉れたかの樣にも思はれる。

支那人の個人的現在主義は、單に人間に對してのみならず、無情無心の草木等に對しても亦同樣である。日本では花より團子などとは云ふものゝ、上野や向島の花盛りには、まだ〳〵花に醉ひ花に吟ずるものが多いが、支那人は野外の花にも床の間の花にも、嗜好が至つて薄いのみならず、適々之れを嗜むものも、滿開の花のみである。されば支那の市場に鬻げる草花でも、貴人の室內に飾れる盆栽の花でも、皆滿開ばかりで、日本人の樣に蕾を愛でゝ、未來の開花を樂しむとか又枯枝を生けて過去をしのぶと云ふ樣な趣味は少しも見えない。矢張り現在主義である。其の他彼の濃厚な支那料理や、敏調な支那音樂が、支那人の口耳の嗜好に適するところを見て

も、其の神經作用が之れに正反對なるべきことを想像されるのである。

之れを心理的に詮じ詰めて行くと、支那人の各個は、人にも物にも、過去にも未來にも、執着しないところの遊離性を天有して居ることが確實で、之れに反し、日本人の各個は何にでも喰付きたがる粘着性が有つて、怨んでも喜んでも、骨髄に徹する方であることが自覺せらるゝのである。無論之れは極端と極端を對照した比較で、支那人にも絶對的に粘着性がなく、日本人にも遊離性が皆無であると云ふ譯ではない。斯く云ふと或は、支那人にも粘着性が無いことはない。彼の『ボイコット』や同盟罷工等の遣口を見ると、却々支那人の團結は堅固で、到底日本人等の及ぶところではないと云ふ人があるかも知れぬが、それは觀察の仕樣が間違つて居るからだ。

斯くの如き團結は寧ろ附和雷同とも謂ふべきもので、附和雷同の因つて起る心理作用は、其の實各個人の遊離性に發し、箒に掃き寄せられたる塵の如きものである。若し此に塵の粘着性があつたならば、却々容易に掃き寄せらるゝものではない。故に『ボイコット』などの裏面には、必ず利益の誘惑か若くは損害の脅迫が伏在して居つて、恰も利害と云ふ嚢に豆を入れて其の口を固く縛つた樣なもので、固まつては居るが、豆粒と豆粒とが相粘着して、一固塊となつて居るのではない。故に利害と云ふ嚢が破れると、直ぐに又バラ〳〵に元の個々の豆粒となるのである。然し、此の頃の日本人の樣に、ヤレ理義とか感情とか、又利害とか、二拍子も三拍子も調はなければ一致せぬのと比較すると、結局支那人の方が單調で、其の團結も固

いかも知れない。夫れは兎に角、支那人の各個が個々に分離して居て、結合力に乏しいのは確かな事實である。而して斯く成り果てた原因は、主として其の團體及び歴史の然らしむるところで、數千年の間に度々其の統治者を代へ、永遠の君主として尊奉すべきものなく、國政の亦屢〻紛亂して國民の生命財産の安固を保證し得られざるときは、各人各個に自己一人を信頼する外頼るべきものなく、過去も未來も度外に置いて、終に個人本位、現在主義に歸するの已むを得ざるに至つたのであるかと考へる。之れに比較すると、我が日本人は實に有難きもので、天地開闢の創始より、離る可からざる萬世一系の君主を戴き、人心の歸一すべき中心が寸分も動かず、上下同心一體となつて、今日迄來りたるが故に、各人各個の粘着性即ち結合心が存續して居る。大和魂の根源も此に存在して居るのである。

先帝陛下も

『我皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ我國體ノ精華』

であると宣はせられた。此の精華の二字は、我々臣民が深く翫味して、拳々服膺せねばならぬとで、精とは精神の精、物の精と同一で、内に潜める神聖純白なる心の根源、又華とは其の外に現はれて、眞、善、美の形象を出現する態を謂ふのである。此の精華を取り去つたならば、我が日本人の日本人たる所以は消滅して仕舞ふのである。されば我々日本人は支那人の如く利害の嚢などで包まるゝことなく、矢張り古の赤穗四十七士の樣に、理

義に合したる至情を以て、一致團結すべきもので、それでなければ眞正の擧國一致も一家團欒も出來るものではないのである。而して其の大本の至情は、此の御國體を知つて、他に比類なき我が君臣の義、父子の親を辨へることから出て來るのである。前にも述べた如く、我が國には古來別段書き連ねた教文も經典もない、我が祖先の垂示は言擧げせぬ教と申して、實行を主としたもので、彼の古事記に見へる神々の實行的垂示は千言萬語に優れる立派な教である。此の言擧げせず書き現はさないところに、我が國教の最も尊い點があるので、自分の信ずるところでは、已に言擧げせられて書き現はされたる經典は、儒教であれ、佛教であれ、又基督教であれ、何であれ、其の言字其の物に附き絡ふたる宗教上の病根があるかと信ずる若し夫れ、淺薄なる西洋倫理などを以て、何故に君に忠ならねばならぬか、何ぜ親に孝せねばならぬかなど云ふに至りては、何ぜ人は人か、何故に一は一かと謂ふやうなもので、分らぬにも程があると思はれる。

宗教談は偖て置き、予は茲に日本人と支那人との性格の相違丈けを述べるので、敢て兩者性格の優劣を比較する積りではないが、此の國民性が其の國の元氣となつて、國勢の消長に至大の關係を持つて居るのであるから、日本人たると支那人たるとを問はず、各其の自性に省み、其の長所短所を自覺して、世界の大勢に對應するの心懸がなければならぬ。支那人の游離性卽ち所謂個人主義は、國民として此の世界に立つて行くに不適當なるは云ふ迄もなきことで、今少し國民各個間の粘着性執着心がなければ、支那

人各個は如何なる富貴を得ても、支那國の存立永續は覺束なからうと思ふ。予は決して支那人に情死をせよ、仇討をやれと勸告するものではないが、情死をし仇討をするに至らしむる丈けの粘着性がなくては、一家も國も持ち切れるものではないのである。粘着性も、我國體の精華の根源とも謂ふべきもので、太く大きな凝結すれば、眞に上乘であるが、夫れが個々別々に部分的に粘着すると、或は藩閥黨閥又は學閥業閥等に惡化して、相排擠反搏して前體の發達を阻害し、更に、ヨリ少し粘着すると、男女二人の情死ともなり、尙ほ極度に少くなると、支那人同樣に單一の個人主義に細化して仕舞ふのである。若し執着心の強い日本人が、此の極端な個人主義になつたら、夫れこそ大變、惡竦、陰險、殘忍、暴虐の一固塊と化して、世に之れ程怖るべき害毒を發生するものはなからうと思ふ。然れば吾人は銘銘各個に此に至らざるやう、留意せねばならぬは勿論、男女二人の情死の如きも、其二人の無き跡で、其父母は何れ程悲むべきであらうか、又其兩家は如何になるであらうかと、一廻り大きな範圍より考へ直すと、其無分別が自覺されるものである。國家問題に藩閥や黨閥を持出したり、町村問題に一人一家の利害を考慮するなども、矢張分別の範圍を小さくするからで、眞正の大和魂は大事には大に小事には小に、夫れ〴〵の範圍に應じて、適當に凝結和合せねばならぬ。我國固有の國民性である。吾人は此の貴重なる大和魂の大と和の二字を最も深く服膺せねばならぬと信ずる。

大戰後に於ける兵器の進化

兵器の進歩と新海軍の創造――日露戰役より歐洲大戰迄の兵器の進歩――潛航艇、飛行機の發達は戰鬪を平面的より立體的に推移す――將來は空中戰

人智の向上と共に、各種の戰鬪機關も年々歲々發達し、遠き昔に顧みれば、棒切れが刀となり、刀が鎗となり、弓が銃となり、銃が砲となるが如く、次第々々に進化し來つたものであるが、最も著しく格段の進歩を見るは、概して大戰爭の後である。其の故は、平時より工夫された各種の兵